聖鬼神

時刻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖鬼神

【Ｎコード】
Ｎ６９２３Ｓ

【作者名】
時刻

【あらすじ】
人間と魔族が共存する世界「ヒュースター」。その中で大自然に恵まれた国「ナチュリコム」に住む青年、ギンリュウは世界の秩序を守る国際組織「ガーディアン」に入る。だけど配属された部隊の隊長と険悪な関係となってしまう。しかもギンリュウは大昔に消えてしまった古の魔法を使う才能の持ち主でもあった・・・・・。

プロローグ（前書き）

初投稿です。おかしな描写があると思いますが良かったら指摘してください。こちらの都合で更新が遅れる事がありますが、出来る限り更新をします。よろしくお願いします。読んで頂くだけでもありがたいです。

プロローグ

それは雨が降り冷たい風が吹いた日の事だった。深い森の奥にある研究所で起こった事件、それは二人の子供達の脱走だった。
「ミリア！どうした早く！」
「う、うん……」
二人とも性別は違ったが同じ銀髪の長髪に若干、似ている顔立ちだった、双子なのだろうとそれは一目みればわかる事だった。
「くそ！大事な実験体を逃がすかよ、追え！」
「ちっ！」
少年は双子の妹の手を引いて走る、その後ろからは完全に武装した警備兵だった。
何故、たかが子供に武装する必要があるか、それは少年が使う魔法が原因だった。
「撃て！撃て！」
「ギンくん！」
「なめやがって！グラビティ・フィールド！」
少年は後ろを向き、呪文を唱えると黒い球体が二人を包むようにして現れた。銃弾はその球体を避けるように軌道が逸れた。
「しまった、古の魔法か……！」
「行くぞ、ミリア！」
少年は再び少女の手を引いて走った。向かうのは出口に向かうエレベーター、二人は必死になって走った。
「よし、エレベーターだ、乗るぞ！」
「うん……！」
少年はエレベーターのスイッチを押す、エレベーターは下からゆっくりと来る。
「まだかよ、早くしないと追いつかれる」
「……！ギンくん！」

「いたぞ！撃て！」
「しつこいんだよ！グラビティ・レイ！」
少年はまた違った魔法を出す、魔法陣が現れてそこから黒い光線が発射される。光線は警備兵と銃弾を吹き飛ばしながら廊下の床と壁をえぐる。
「ぐわぁぁぁぁぁ！」
「ギンくん、エレベーターが来たよ！」
「よし！行くぞ！」
二人はエレベーターに乗り出口へと向かった。
それから数十分後、警備兵はあの双子を見失った。

その頃、ここにも一つの事件が起こった。研究所にある一つの部屋、そこには二人の研究員がいた。
『す、すいません！目標の実験体を見失いました……』
「な、何をやっとる！たかが子供を二人、何故、取り逃がす！」
『実は実験体の二号が古の魔法を使いこなし、警備兵の数十名が重傷もしくは軽傷を負ってしまいまして』
「言い訳はいい！さっさと探すんだ！」
『は、はい！』
ソファーに座りテーブルにあった受話器を乱暴に戻した研究員をよそに向かい側のソファーで紅茶を飲む研究員は静かに笑う。
「まったく、やられましたな」
鋭い猫目に紺色の短髪をした彼の名はガゾーマ、ある研究機関に所属する研究者。
「な、何、落ちつているんだ！大事な実験体を逃がしたんだぞ！」
「実験体？」
焦る研究員の言葉にガゾーマは紅茶を飲むのを止めた。
「いけないな、彼らを実験体と呼ぶなんて」
「ふん、あれは研究のための道具しかないのだよ」
「それは違う、彼らは私たちにとって重要な人物だよ」

「何を言って……！」
ガゾーマは着ている白衣から銃を取り出し、研究員に突きつけた。
「だから君は、二流の研究員なのだよ」
ダーン
ガゾーマは銃の引き金を引いた、銃弾は研究員の額に当たり、研究員は死んでしまった。
「きっと彼らは我々の元に戻ってくる、大切な家族を取り戻すために……」
それは雨が降った日に起こった二つの事件、それを知る者はその場にいた者しかわからない。
そして三年の月日が経った……。

プロローグ（後書き）

良かったら感想など、お願いします。

第一話　銀髪の青年（前書き）

本編が開始します、楽しんでいってください。

第一話　銀髪の青年

人間と魔族が共存する世界“ヒュースター”、その世界の秩序を守るために作られた国際組織“ガーディアン”は世界中の国々に支部を設けてある。その中の一つ、大自然に恵まれた国“ナチュリコム”にある支部で今日、半年に一回の入隊試験の合格発表があった・・・・・。

ナチュリコムの首都　ベールゼ郊外にある、とある家

「やべー、なんで今日に限って寝坊してしまったんだ」

銀髪の長髪にかなり大人びた顔つきをしている青年は慌ただしく準備している、彼は入隊試験を受けた一人であり、今日、合格発表の場であるナチュリコム支部に向かうために準備をしていた。

「もう、昨日、遅くまで起きているからだよ」

「うるせぇ、眠れなかったんだよ！」

彼の名前はギンリュウ・スペイエル、十九歳、銀髪の長髪に鋭い目、クールな感じのする顔立ちをした青年だ。

ギンリュウは藍色のワイシャツを着て、玄関でブーツを履く。

「んじゃ、行って来るな！」

「うん、受かるといいね」

「ちぇ、確実に“ガーディアン”に入れる奴に言われたかねーよ」

ギンリュウと同じ銀髪の長髪をしているがギンリュウより若干短く、顔つきもまだ幼い感じがしていた。彼女はミリア・スペイエル、彼の双子の妹だ。

「行って来ます！」

ギンリュウは和風に作られた玄関を出て、家の隣にある車庫のシャッターを開ける、そこにある青くボード状のホバーバイクを出し、車庫のシャッターを閉める。そしてバイクにまたぎ、魔力を込めてエンジンをかけアクセルを踏む。

「よーし、行くぜ！」

バイクはかなりのスピードで発進し、瞬く間に家から遠のいた。
「よし、私も準備しよっと」
ミリアは自分の部屋に戻り、先日もらった“ガーディアン”の制服に着替える、長袖の上着や腰当ては灰色に黄色のラインが入っている、ズボンは白一色となっている。
「私も今日から“ガーディアン”の一人、頑張るぞ！って、あ、ギンくんに送ってもらえば良かった・・・・・・」
ミリアはしまったという顔をしたが、すぐに普段の顔つきに戻った。
「しょうがないか、私は確実になれるけど、ギンくんはわからないからね、まぁ、ギンくんなら大丈夫でしょ」
そしてミリアも玄関で靴を履き、外に出る。
「行って来ます、姉さん・・・・・・」
ミリアは振り返り誰もいない家に一言を言った、今は離ればなれになっている家族の事を呟いた。

ガーディアン　ナチュリコム支部　一階ロビー
ベルーゼの東部にある高い円柱状のビル、ここがガーディアン支部の一つであった。
「えっと、確か受付で受験票を見せるんだよな」
ギンリュウは支部の入り口に入るとすぐある目の前の受付に向かった。
「あの、この前の入隊試験を受けた者ですけど・・・・・・」
「はい、それでは受験票を見せてください」
「あ、はい」
ギンリュウはリュックからファイルを取り出し、中にあった受験票を出し受付嬢に渡した。
「はい、受験番号２８１、ギンリュウ・スペイエルさんですね、合格発表は二階のホールで行われます」
「ありがとうございます」

ギンリュウは二階に上がるため階段を上り、そしてかなり広いホールへと着いた。
「うわぁ・・・・・・、たくさんいるな」
受験番号は受け付けた順番のため、少なくても三百人以上はいると思われる。
「合格できるか、不安になったな」
するとホール一番奥の壁に大きな紙が張り出された、多分合格者発表なのだろう。
「くそ、人が多すぎて前に進めねぇ」
人混みをかき分けやっと前に出たギンリュウは合格発表者の紙を見る。
「えっと、２８１、２８１・・・・・・」
書かれていたのは受験番号、ギンリュウは自分の番号を探す、そして・・・・・・。
「２８１、あ、あった！合格したぞー！」
喜びのあまり思わずその場でジャンプをしてしまったギンリュウは、はっと我に返る。
「おっとと、さすがにここから離れないと」
その後、ギンリュウは入隊式を行う育成学校に向かう事になった。“ガーディアン”は二つの方法で入る事が出来る、一つはギンリュウが受けた入隊試験、半年に一回行われるが合格者は五十人にも満たないが受験費が安く、誰でも受けれるためか、毎回試験を受ける人は多い。もう一つは育成学校で卒業して入隊する方法で確実に入れるが、入学試験が厳しく、しかも学費が高い、そのため一部の人達しかは入れず生徒人数も他の学校に比べ少ない。
「ミリアに早く伝えなきゃいけないな、よし、行くか！」
ギンリュウはホバーバイクに乗り、ミリアのいる育成学校に向かった。

第二話　入隊

ガーディアン育成学校　ナチュリコム校
「えっと、講堂で就任式があるって聞いたけど、講堂ってどこだ？」
ギンリュウは学校に着いたまでは良かったが就任式の式場である講堂がどこだがわからなくなってしまった。
「ここの学校は相変わらず広いから迷子になりやすいんだよな・・・・・・」
辺りを見回しているとここの生徒らしき少年がいた。
「しょうがないか、あの子に聞いてみよう」
ギンリュウは少年の方に向かう、すると少年の方もこちらに気づいたのかギンリュウの方に向かってくる。
少年はまだ幼い顔をしていたが、身長は平均的だった。多分１７かそこらであろうとギンリュウは納得していた。ギンリュウの場合、年齢の割には身長も高いし大人びた顔つきをしている。たまに二十三歳と間違われた事もあった。
「「あの・・・・・・」」
お互いに声をかけようとするが被ってしまった。
「え？」
「あ？」
「あのー、もしかして、そちらも迷子ですか？」
「と言う事は君もか・・・・・・」
二人は同時にため息をついた。
「しょうがない、情けないがミリアに連絡するとするか」
ギンリュウは小型の携帯機器“ゼロローム”を取り出した。
「すいません、役に立てなくて・・・・・・」
「いいよ、俺も迷子なんだから、えっと、お、通じた」
『はい、スペイエルですけどってギンくん、どうしたの？』
「わりぃ、ミリア、俺さ、どうやら迷子になったみたいでさ」

『わかった、向かいに行けばいいのね、今どこ？』
「ここは・・・・・・」
「南校舎の裏側です」
場所を教えてくれたのはさっきの少年だった。
「だとよ」
『わかった、すぐに行くね』
「悪いな、よろしく頼むわ」
ギンリュウは“ゼロローム”をしまって、少年としばらく雑談する事になった。
「僕はディネカル・アークソンと申します、みなさんからディルと呼ばれています」
「俺はギンリュウ、ギンリュウ・スペイエルっていうんだ」
「スペイエル・・・・・・、さっき、ミリアさんという方と話していましたが、もしかしてミリア・スペイエルのご家族かなにかですか？」
「あぁ、俺はあいつの双子の兄だ」
「そうなんですか」
そんな話をしているとミリアが迎えにやって来た。

ガーディアン育成学校　ナチュリコム校　講堂
「おめでとう、訓練生諸君、そして受験合格者諸君も、君たちはこれからこの“ヒュースター”の秩序を守るために精一杯頑張ってほしい」
今回の合格者や卒業者は約１６０人、その大半が訓練生だった。
「えー、まず、今回の学生首席と受験首席を紹介したいと思う、名前を呼ばれた者は前に出てきてください」
学生首席と受験首席は名誉のあるものらしいがギンリュウにとってはどうでも良い事だったが・・・・・・。
「まず、学生首席はミリア・スペイエル」
「はい」

（あいつが学生首席か、ディルの言うとおりだな）
「そして、受験首席はギンリュウ・スペイエル！」
「え、あ、はい」
講堂全体が騒ぎ出した、ギンリュウは慌てて立ち上がり、壇上にあがった。
「スペイエル？」
「もしかして、ミリアさんのご兄妹？」
「兄妹そろって首席を取るなんてすごいな」
そんな事をささやきが聞こえていたがギンリュウはものすごく緊張していたために頭の中を素通りしていった。
「ギンくん、いつも通りにしていいよ」
「俺が首席に選ばれるなんて、考えてもなかった」
「私は予想していたけど？」
二人はナチュリコム校の学長から祝辞と配属される部隊が書かれた紙を渡され、二人はそれぞれ席に戻った。

就任式は終わり、二人はホバーバイクがある場所に向かった。
「ねぇ、ギンくんはどこに部隊に配属されたの？」
「さっき、見たけど第十二部隊だってさ」
「きゃぁー、本当？私も十二部隊なのよ」
ミリアは大げさに喜ぶ、ギンリュウと一緒だったのがよほど嬉しかったのだろう。
「まったく、喜ぶのは良いんだけどさ、大げさしすぎるぞ」
「だって、ギンくんと一緒に戦えるなんて、うれしいに決まってんじゃん」
「あのな・・・・・・」
ギンリュウはため息をつく、今は一緒でもこの後、転属やら何やらで離ればなれになるかもしれないからだ。
「あのー」
「ん？」

ギンリュウとミリアは声のする方を向いた、そこにいたのはギンリュウと一緒に迷子になったディルだった。
「さっき、お二人の話が聞こえちゃたんですけど、十二部隊なのですか？」
「え、あぁ、そうだよ」
「良かった、僕も十二部隊に配属になったんですよ！」
「本当か！」
「これからよろしくね！」
「はい、一緒に頑張りましょう」
「じゃ、第十二部隊の宿舎に向かうとするか」
「ちょっと待って、ミリア」
ミリアはギンリュウのバイクに乗ろうとするが、ギンリュウに止められる。
「どうしたの、ギンくん？」
「このバイクは二人までしか乗れないんだぞ」
「あ、そっか」
「別に僕は構いませんよ」
「そういうわけもいかないよ」
そんな時、偶然通りすがった男性後ろから声をかけてきた。
「君たち、なにか困った事でもあったのか？」
その男はここより南西にある国の髪型、サムライヘヤーをしており、顔つきもかなり渋く、ものすごく落ち着いた口調だった。
「あ、いえ、これから第十二部隊の宿舎に向かいたいのですが、俺のバイクが二人乗りでして・・・・・・」
「第十二？だったら俺も向かうところだ、良かったら俺の車で行かないか？」
「え、いいんですか？」
「バイクは荷台に乗せればいいだろう」
「あ、ありがとうございます！」
こうして、同じ第十二部隊に配属となった男、バーシュ・ガラン

ファルと行く事になった。

それから約一時間、ついに第十二部隊の宿舎の正門に着いた。

「うへー、結構広いな・・・・・・」

ぱっと見て二十ヘクタール（一辺百メートルの正方形の面積が一ヘクタール）ぐらいはあり、そこに正門に向かってコの字型の二階建ての宿舎があり、これもかなり大きい。

「なんせ、一部隊に二十五人以上がいるって話ですから、当然ちゃ当然ですよ」

「とりあえず、インターホンを鳴らそうよ」

ギンリュウは車から降りて正門の柱にあるインターホンを鳴らす。

ピーポーン

『はい、どなたでしょうか？』

出たのは若干声が低いが耳の良いギンリュウは女性だとわかった。

「あの、今日から配属となりましたギンリュウ・スペイエルですけど・・・・・・」

『あぁ！新人か、わかった、ちょっと待っててくれ』

と言ってインターホンが切れた。

数分後、宿舎の中から一人の女性が出てきた、かなり鍛えられているが筋肉はつけすぎずにちょうど良い感じで所々に傷跡がある。

「おっと、一人じゃないのか」

「車はどうすれば？」

「今、門を全開するから、開けたら入ってくれ」

「了解した」

女性が門を開けるとバーシュは車を敷地内に入れる。

「今回は四人配属される予定だけど・・・・・・、全員いるな、よし、会議室に案内するからついてきてくれないか」

女性の言うままにギンリュウ達は宿舎内に入る。

中に入ると目の前に階段があって左右に廊下がある、ルエは左に曲がった。

「俺はルエ・ディルティーラ、この部隊の副隊長を務めているんだ」
「ルエ・・・・・・？聞いた事がある確か“聖女を守りし者”の一人だ」
「“聖女を守りし者”？」
「あぁ、隊長の直属をそう呼ぶ奴いるな、おっと、着いたぞ」
ルエは左廊下の一番奥にある扉をノックをした。
「隊長、新人を連れてきましたよ」
「入りなさい」
扉を開け、ルエが入る、続いてギンリュウ達が入る。
「え、これは・・・・・・」
ギンリュウ達は目を疑う、隊員の大半が女性で占めており、男性は数える程しかいない。
「隊長、今回、育成学校の卒業生と試験の合格者が二名ずついます」
「そう、わかったわ・・・・・・」
ルエの言った事に答えたのは右側にサイドポニーをした、ギンリュウより若干幼い顔立ちをした女性が答えた。
「ようこそ、第十二部隊、通称“聖女部隊”へ」
「“聖女部隊”・・・・・・？」
女性は大半を占める第十二部隊、そしてこれから起こる波乱の幕開けは誰も知らなかった。

第三話　最悪の初日

第十二部隊、通称“聖女部隊”。部隊の大半が女性という変わり種ではあるが全体的に実力の高い部隊であり、さらに隊員は色んな分野を得意とするため様々な任務をこなせる、適応力の高い部隊である。

（しかし、ここまで女性が多いとは・・・・・・）

「私がこの部隊の隊長を務める、リエ・マレンデカルよ、早速だけど自己紹介をしてもらえるかしら」

「第五十期卒業訓練生！ディネカル・アークソンです。よろしくお願いします！」

「同じく第五十期卒業訓練生、ミリア・スペイエルです。頑張ります！」

「第百期試験を合格いたしました。バーシュ・ガランフィルです」

「同じく第百期試験を合格しました！ギンリュウ・スペイエルです、今日からお世話になります」

「・・・・・・」

一通りの自己紹介をした後、リエからとんでもない言葉が出てきた。

「最初に言っておくけど、この宿舎の掃除、洗濯、庭掃除は男がやるから、その所、理解してね」

「「えぇーー！」

ギンリュウとディルは思わず絶叫した、まさか入隊初日でこんな事を言われるなんて思いも寄らなかったからだ。

「また、始まったか・・・・・・」

ルエは思わず手を顔に当て、苦い表情となった。

「何故、ですか？隊長殿」

「理由は単純よ、男が嫌いだから」

「待ってください、じゃあ、なんで男を入れているのですか？」

「“ガーディアン”の規定でね、どちらかが多くてもいいから男と女、人間と魔族を両方入れなきゃいけないのよ」
ギンリュウは納得のいかない顔をした、いくら男が嫌いだからってここまでする必要はないじゃないかと思っていた。その考えをリエは見破った。
「あら、なんか不満げな奴が一人いるようだけど」
「あぁ、なんか、むかつくんだよ」
ギンリュウは睨んだ、元々鋭い目つきがさらに鋭くなった感じであったが、リエもギンリュウを睨んだ。
「言っておくけど、この部隊の隊長は私よ」
「そうですね、だけど俺があんたの事を嫌いなのは別でしょ？」
リエは不機嫌な顔になった、今まで文句を言う人達はいたけれど、無理矢理、納得させてた。しかしギンリュウは本当に敵意というものを感じさせる程、睨んでいた。
「・・・・・・どうやら、私たちは気が合わないみたいね」
「そうみたいですね」
二人はまるで水と油、犬と猿、みたいに対極になっており。そして二人の間に誰も入り込めなくなってしまった。
「あ、あの、二人共その辺にしといたら・・・・・・」
「「ルエさんは黙ってください！」」
「わ、悪かった」
ルエはそそくさと後ろに下がった。
二人はお互いに睨み合い動かない、それを見ている人たちはどうしたらいいか悩んでいた。
「あ、あの二人、いつまでああしているんだ？」
「し、知らないわよ」
その時、二人の頭を拳骨で殴った者がいた。
「いた！」
「きゃ！」
「あんたら、いい加減にしないか、他の者が怯えきっているぞ」

すっかり重たい空気になってしまった雰囲気をうち破ったのバーシュだった。
「な、何するのよ、あなた！」
「何をするんですか、バーシュさん」
「まったく、入隊初日でこの雰囲気と先が思いやれる」
「邪魔を・・・・・・」
バーシュはかなり厳格のある目つきでリエを睨んだ。
「とにかく、二人とも今日の所はここまでにしてほしいが、依存はないな？」
「「はい・・・・・・」」
「じゃあ、新人は部屋を案内するから、来てくれ」
ギンリュウとリエはまたお互い睨み、そっぽを向いた。その場にいた全員がやれやれと肩をすくめ、ギンリュウ達はルエに部屋を案内してもらうため、会議室を出た。

第十二部隊宿舎　二階住居スペース
部隊によって違うが第十二部隊の場合、二階が住居スペース、一階が会議室や食堂など様々な理由で使われている多目的スペースとなっていた。
「まったく、いきなりケンカを売ってるんじゃないわよ、しかも隊長に」
「はん、本当にむかついたんだから、しょうがねーだろ」
ミリアはギンリュウの性格を良く知っている、冷静だけどケンカ早くって、なんでも口に出さないと気が済まない素直な性格、それがギンリュウだった。
「悪いな、でも隊長も本当は優しい人なんだ、許してやってくれ」
「まぁ、ルエさんが言うなら・・・・・・、でも俺はあいつの事、大嫌いですから」
「おおう、そこまで言うか」
ルエはギンリュウの強気な態度に苦笑をした。まさか、隊長であ

るリエに逆らう新人がいるとは思わなかったからだ。
「えっと、ここがギンリュウとディネカルの部屋、バーシュさんはロウガって奴と同じ部屋、ミリアは俺と一緒の部屋だ、よろしくな」
「はい！」
「よろしくな、ディル」
「はい、こちらこそ」
「ロウガ殿か・・・・・・、一体どんな人なんだろうな」
最悪な初日となってしまったがなんとかやっていこうとギンリュウは決めた。

ギンリュウとディルの部屋は十五畳の広さでベットは二つに机も二つ、大きめのタンスが一つと必要最低限の物が揃っていた。
「じゃあ、おやすみなさい、ギンリュウさん」
「あぁ、おやすみ」
夜、ディルは寝て、ギンリュウは窓から見える星空を見上げていた。
（・・・・・・ここからだ、待っててくれハル、必ず助けてやるからな・・・・・・）
ハルと言う名前を思い浮かべたギンリュウもそのままベットで寝た。

第四話　出動！ヒトナキの森

ギンリュウ達が入隊して一週間、現在ギンリュウはディルとロウガという赤毛で兄貴的存在の人狼と共に庭掃除をやっている。
「くそ、あの隊長、マジでこんな広い庭の掃除をやらせなくてもいいじゃないか」
「というギンもきちんと毎日、掃除やらなんやらをこなしているじゃないか」
「うっ、それは家では俺が家事をしていましたから、癖って言うか、なんていうか」
とはいえ、ギンリュウはリエと毎日ケンカしていた。
「つーか、ケンカするほど、仲がいいってよく言うけどさぁ、ギンと隊長の場合はケンカするほど仲が悪くなっていないか？」
「あ、それはありますよね」
「うるせぇ！さっさと庭掃除を終わらして、風呂掃除に行くぞ！」
ギンリュウはせっせと箒をはく、ディルとロウガはため息をついた。そんな彼らを部屋の窓から見ていた人がいた、リエであった。
「ふふ、いいざまね。しかし本当にギンリュウって奴はむかつくわね、なんとかしないと・・・・・・」
そんなとき、扉からノックの音をした。
「はーい、開いているわよ」
「失礼します」
入ってきたのはこの部隊のもう一人の副隊長、アスカ・ガーヴァルであった。
「何のよう？」
「実は支部から早急にやってほしい任務があると伝達してきて」
「どんな任務？」
「えっと・・・・・・」
アスカが任務の内容を言うとリエは少々不気味な笑顔をした。

「それはいいわぁ、この任務ではっきりと力の差ってやつを思い知らしてやるわ！」
　リエは小さな声で笑う。
「・・・・・・？」
「どうしました？ギンリュウさん」
「いや、今、寒気って言うか、なんかおぞましい気配を感じてしまったのでな」
「気のせいだろ、早く行こうぜ」
　ギンリュウ達は庭掃除を終えて、宿舎へ入ろうとした時にルエが宿舎の中から声をかけてきた。
「お前ら、掃除はいい！会議室に来い！」
「会議室に？」
　ギンリュウ達はすぐさま掃除道具を片づけて、会議室に向かった。

第十二部隊　宿舎　会議室
「今から任務の内容を説明するわ！」
　リエはなんだか弾んだ声で嬉しそうに言った。
「なんか、ご機嫌いいですね、隊長」
　ギンリュウは皮肉を込めて言った、なんだか嫌な予感しかしなかったからでもあったが、何よりギンリュウとリエはお互い仲が悪い、喧嘩腰になるほど。
　リエはでかいディスプレイに電源を入れ、ナチュリコムの全体図を出した。
「今回はここから北三十？離れた、ヒトナキの森に向かうわ」
「ヒトナキの森・・・・・・」
　ギンリュウは自然や動物が好きで、よく観察しに行った。ヒトナキの森は一週間に一度行った程、馴染みのある森であった。
「この森でワイバーンが住み着いたらしいの、人を襲っているから今回はその討伐ね」
「ワイバーン？あの森にはワイバーンは住み着かないはずだが・・・

・・・？」
　ギンリュウが考えていた、ワイバーンはかなりの種類はいるがどれもヒトナキの森を好まず住み着かない、なぜならヒトナキの森はワイバーンの天敵とも言える植物があるからだ。
「もしかして、ヒトナキの森に適応した新種のワイバーン？でもな・・・・・」
「ギンリュウ、考え事は後にしてよ。会議中よ？」
「へいへい、申し訳ございませんでした」
「まったく、相変わらずむかつく態度をとるわね」
「隊長ほどではあるせんが？」
「なんですって！」
　二人はいがみ合った、その場にいた全員はどうしてこうまでこの二人は仲が悪いのだろう、誰もが思っていた。
「二人とも、会議中だ、止めないか！」
　バーシュはケンカしている二人を睨んだ、二人を止めるのはいつもバーシュの役目だった。さすがの二人もバーシュには勝てない、二人は大人しく引き下がる事にした。
「で今回、実行部隊の編成は？」
「私とアスカさん、ルエさんにバーシュさん、ミリアちゃんにディル、それとギンリュウ、あなたも連れて行く事にしたわ、感謝しなさい」
「なんで、いちいち、感謝しなくちゃならんいんだよ！」
「あら、ただ単にあなた達、新人の実力を見たいだけよ」
「あっそ、じゃあ、俺の実力をみて、嘆くなよ」
「誰が嘆きますか」
　二人は再び、睨み合ったが、バーシュはまた二人を睨み、結局引き下がる事になった。

第十二部隊　宿舎屋上
「なんか無駄に広いなぁと思ったら、こういう事だったんですね」

「どぉりで、ここに洗濯物を干すなって言われるはずだよ」
ギンリュウ達の目の前にあるのは、ヘリ。これでヒトナキの森に向かうらしい。
「何やってんの、さっさと乗りなさい！もしかして怖くなったとか」
「誰が怖くなったって！」
ギンリュウは怒りながらヘリに乗る、呆れたミリア達も続けてヘリに乗る。
「絶対、隊長に負けない！」
「それはこっちのセリフよ！」
ヘリの中でもケンカしてバーシュに睨まれるギンリュウとリエだったが、この場にいる全員はこれから起こる異変はまだ知らない・・・・・。

第五話　ワイバーン討伐戦（前書き）

三日ぶりの更新です。
任務系統の話などは二話構成でいきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第五話　ワイバーン討伐戦

ヒトナキの森、ナチュリコム北部に広がる森であり、約三百ヘクタールあるとされている。様々な植物や動物が住んでおり、生物研究者は宝庫の森とも呼んでいた。
出発してから数時間後、ヒトナキの森の入り口だと思われる所にヘリは着陸した。
「まさか、ここに来るとはね・・・・・・」
ギンリュウにとっては一ヶ月ぶりであった。試験やらなんやらで忙しすぎて観察にいけなかったからだった。
「ギンリュウ、本当にこの森にワイバーンは住み着かないのか？」
「はい、この森にはワイバーンが嫌う臭いを放つ植物がそこらじゅうにあるのです」
「と言う事は新種なのかしら？」
ギンリュウとルエが話しているとリエが割り込んできた。
「た、隊長」
ルエは焦った、またケンカが始まるかもしれないからだ。
「それはないですよ、隊長」
しかし、ギンリュウは冷静にリエの問いに答えた。
「そもそも、ワイバーンはずっとこの森に住み着かなかった、それにここは拓けたな場所がない程、森が覆い茂っているし、ワイバーンの巣に適している木々などがない」
ギンリュウは淡々とワイバーンの生態を喋り出す、このままでは日が落ちてしまうためリエはさっさと森の奥へと入ってしまった。
「だから・・・・・・、って、あ！待てよ！」
ギンリュウも急いでリエ達の後を追う。

「なんなの、この森は、方向感覚が狂うわ」
「この森は全体的に感覚を狂わす魔力が溢れているからな、感覚で

頼るのは危険だ」
「じゃあ、どうすればいいんだ？ギンリュウ」
「このコンパスを使うんです」
ギンリュウが取り出したのは機械式のコンパスだった。
「なるほど、機械式なら魔力に翻弄される事はないんだな」
「はい、俺、観察しに色んな場所を行くんで、その場所に適した道具を持っていく事に慣れまして」
「無駄話はいいわ、さっさと問題のワイバーンを探すわよ」
リエはさらに奥へと進む。
「あ、隊長、待ってて・・・・・・」
その時、何かが羽ばたいている音が聞こえる、しかも、徐々に近づいてくる。
「な、なに？」
「ギンくん・・・・・」
「この気配は敵意？」
「来るぞ！」
全員が上を向いた、大きいな翼と強靱な体をしているワイバーンだった。
「そ、そんな、あれは・・・・・・」
ギンリュウは目を疑った、新種でも何でもない在来種で、一番この森に住み着かないワイバーン。
「ダーク・ワイバーン！？」
ワイバーンはギンリュウ達の目の前に降りてきた、黒い体のためか、真っ白な牙と赤い目が目立つ、ワイバーンの中でも大きい部類に入る。
「なんでだ？ダーク・ワイバーンはこの森にある植物の臭いを特に嫌っているはず」
「どうでもいいわ、来るよ！」
ワイバーンは翼を広げてギンリュウ達に向かって滑空してくる。
「こんな狭い所でか！？」

ワイバーンの翼は木々の幹を切り裂きながら来る。
「隊長！」
「くっ！」
リエはギリギリでしゃがむ、ギンリュウ達も避けたりしゃがんだりして、なんとか難を逃れる。
「ダーク・ワイバーンは最低限の筋力しか持たないはずなのに」
「なに言ってんのよ！また来るわよ！」
「ダーク・ワイバーンとは違う種類なのか？」
全員がそれぞれの武器をかまえる、ギンリュウは普通の剣より刃が長く青みかかった剣でを取り出した、その武器の名は“アースバーン”。
「とにかく、やるしかないか・・・・・・」
「みんな、行くよ！」
リエがまず先行する、次にルエ、ギンリュウ、バーシュ、後方にはどんな時でも対応できるようにとミリアとディル、アスカの三人が待機していた。
「図体大きければいいてもんじゃないわよ！」
ギンリュウはワイバーンに向かいながら考え事をしていた。
（もし、あのワイバーンがダークと同系統の種類だとしたら・・・・・・）
そんな事を考えていたら、リエがワイバーンに斬りかかろうとした。
「た、隊長！だめだ！」
リエは剣を大きく振りかぶって剣をワイバーンに斬りつけようとする。しかし・・・・・・・
キーン
「うそ！？」
リエがはじき返された。
「ダーク・ワイバーンは甲殻が非常に堅いんだ！無理に斬ろうと思ってもだめだ！」

「それを早く言いなさいよ！」
「う、さすがにごめん・・・・・・」
「二人とも来るぞ」
ワイバーンは口の中に炎をためている。
「まずい！」
ギンリュウはリエより前に出た。
「ギンリュウ！？何するつもり」
ワイバーンはギンリュウ達に向かって炎を吐く、火炎弾と化した炎は一寸狂いもなくギンリュウに向かう。
「ギンくん！」
「ギンリュウさん！」
しかし、ギンリュウは冷静だった。そして、魔法を唱えた。
「グラビティ・フィールド！」
ギンリュウが魔法を唱えると、ギンリュウの周りに黒い球体が現れた。火炎弾はそのまま軌道を逸れて遙か後方にある木に着弾した。
「な、なんなの？」
「ミリア！行けるな！」
「うん！」
ギンリュウがそう言うとミリアは後方から前線に出る。
「彼の者、ミリアの魔力を上げよ！マジック・ゲイン！」
ギンリュウがまた別の魔法を唱えるとミリアの足下に魔法陣が出てくる。
「行くよ！ホーリー・レイ！」
ミリアがそう唱えると白い魔法陣が出てきて、純白な光線が光りに包まれながらワイバーンに向かって直進する。ワイバーンはそれを避けようと飛ぼうとするが・・・・・・。
「させるか！グラビティ・ドライブ！」
ギンリュウは手をワイバーンに向けながら唱える、するとワイバーンはいきなり地面に叩きつけられた。
「なんだぁ、いきなりどうしたんだよ」

その場にいた者は状況を読めていなかった、誰もが見た事のない魔法を見せつけられ圧巻してしまった。
地面に叩きつけられたワイバーンは立ち上がろうとするが、なかなか立ち上がれない、そしてミリアが出したホーリー・レイに直撃を食らってしまった。
「ギャァァァァ・・・・・・」
そのままワイバーンは地面に倒れ動かなくなった。
「よし、任務完了！」
「やったね！」
ギンリュウとミリアは喜んでいるが、他の者は目の前に起こった事に驚き動けなかった、あのリエでさえ驚きの顔を隠しきれなかった。
「一体、何者なの、あいつら」
「見た事もない魔法系統だったな」
「・・・・・・」
そんな、第十二部隊の様子を遠くから見ていた者がいた。
「へぇ、誰が僕のワイバーンを倒したと思ったら・・・・・・」
その正体はパーカーを被った少年だった、髪の色が黒だったが顔立ちはギンリュウによく似ていた。
「ものすごく強くなっているじゃないか、再会する日がとても楽しみだよ」
少年は持っていた宝石に念を込めて消えた。

第十二部隊　宿舎屋上
「よし！初任務は成功！」
「・・・・・・」
リエは不機嫌だった。
「どうしたんですか、隊長？」
ギンリュウはバカにしたような目でリエを見た。
「う、なんでも無いわよ！調子に乗るじゃないわよ、あんなの偶然

だわ、ぐ・う・ぜ・ん！」
「はいはい」
その日、ギンリュウが上機嫌でリエが不機嫌だったのは言うまでもなかった。

第五話　ワイバーン討伐戦（後書き）

第五話より前の話に特徴やら修正やらを付け加えました。
今まで呼んでくれた方、設定や世界観がわかりづらくて申し訳ございませんでした。
これからも聖鬼神をよろしくお願いします。

第六話　謎の施設（前書き）

毎回、毎回の文字数が少なかったり多かったりしていますが、区切りが良い字数が毎回違うのが原因です。すいません。

第六話　謎の施設

ヒトナキの森での任務から二週間、ギンリュウ達第十二部隊は新たな任務が課せられた。
「今回の任務はヘルヘブン砂漠の調査よ」
「理由は？」
ギンリュウが当たり前の質問をするが、リエは少し不機嫌な顔で不機嫌な声を出した。
「ここの砂漠は砂嵐が起こらないのはみんなも知っているわよね」
「あぁ、それにあそこは気温は高いが他の砂漠に比べ平均気温が低いから砂漠越えがしやすい事で有名な砂漠だしな」
「それが最近、砂嵐が頻繁に起こって、砂漠越えをしようとする旅人や旅行者を阻んでいるんだ」
ルエは深刻な声で言った。
「砂嵐が？」
「本当なんですか？」
ギンリュウやミリアだけではなく、その場にいた全員が驚いた。
「えぇ、だから調査が必要なのよ、今回は私、アスカさん、ルエさん、ミリアちゃん、ギンリュウで行く事にするわ」
リエが嫌っているギンリュウを連れて行く訳は、その場にいた全員が理解していた。ギンリュウはナチュリコムの自然や生態をほとんど知り尽くしており、部隊の助けとなっていた。
「すぐに出発するから、呼ばれた者はすぐに準備をして、では解散！」
会議が終わると、ギンリュウ達はすぐさま準備をしてヘリに乗った。

ヘルヘブン砂漠　東部極地
ヘルヘブン砂漠はナチュリコムの西部から南西部にかけて広がる

砂漠で隣の国に行くにはここを通らないと行けない。
　ギンリュウ達はヘリで行けるところまで行きたいとこだったが・・・・・。
「まさか、ここまで砂嵐が起こっているなんて」
　ギンリュウ達の目に映るのは砂嵐のみ、しかもかなり強力な砂嵐でまったく先が見えない。
「これじゃ、調査どころじゃないね」
「しかし、ここまで強力な砂嵐が起こるものか？」
　その時、全員の通信機から連絡が入る、相手はディルだった。
『隊長！ギンリュウさん！』
「ディネカル、どうしたの？」
『はい、実はヘルヘブン砂漠に僕の知り合いがいるのを教えるの、忘れてしまいました』
「「それを早く言えー！！」」
　ものの見事にギンリュウとルエの声が被る。
『だ、だから忘れていたって言ったじゃないですか』
「で、その知り合いはどこにいるの？」
『東部極地にある小屋に住んでいます』
「小屋・・・・・・？」
　全員は辺りを見回す、すると・・・・・・。
「あれか？」
　ここから二〇〇メートル離れた先に小屋はあった。
『その小屋に住んでいる、ダンジャルさんという方がいます』
「ダンジャル？」
　ギンリュウは思い出した事があった、よくここに来たときにお世話になった人の事を。
「あぁぁ！！」
「どうしたのよ」
「思い出したんだ！砂漠越えにはその人の強力が必要だって事！」
「・・・・・・」

その場に全員が黙ってしまった、そして、リエが怒ったような声で。
「どうして、早く思い出さなかったのよ！」
「最近、行ってなかったからすっかり忘れてた」
「あはは・・・・・、とにかく小屋に向かうか」
ギンリュウ達は小屋に向かったが、ギンリュウとリエの口げんかはやまなかった。
「しまった、今回はバーシュさんがいなかった」
とルエが小さな声で言った。
ダンジャルと言う人が住む小屋はかなりぼろかったが、近づいてみるとかなりしっかりとした作りになっていた。
「こんちわ～、ダンジャルさん、いますか？」
ギンリュウがドアをノックするとドアが開く。
「はい、どなた？」
出てきたのは無精髭を生やし男で身長はギンリュウよりも高い。
「ひ、久しぶりです、ダンジャルさん」
「お？おぉー！ギンリュウじゃねーか、久しぶりだな、最後に来たの、いつだ？」
「二ヶ月前ぐらいですかね」
「そうか、まぁ、入れよ、そこのお嬢さん方もどうぞ」
「お、お嬢さんって」
リエはダンジャルに嫌悪を抱いた。

ヘルヘブン砂漠　ダンジャルの小屋
「俺の名はダンジャル・ベージェ、このヘルヘブン砂漠に住んでいる一人さ」
「一人？と言う事はこの砂漠に住んでいるのはダンジャルさんだけだはないって事？」
「あぁ、砂漠のあっちこっちで住んでいるぜ」
「じゃ、聞きたい事が一つあるんだけど」

リエは不機嫌って言うよりは嫌悪感しか出していない。
「なんだい、お嬢さん？」
「お、お嬢さんって呼ぶな！私は二十一だぞ！」
「え？」
ギンリュウとミリアは驚いた顔をした。
「隊長って私たちより年上だったんですか？」
「え、あ・・・・・・」
リエは思わず顔を赤めた。
「とりあえず、ダンジャルさんならこの砂嵐の原因はしっているじゃないですか？」
「知ってたとしたら？」
「教えなさい！」
「嫌だ」
「なっ！？」
ダンジャルは真面目な顔して、ギンリュウ達に向かってこう言った。
「原因を教えたところでなになる？この砂嵐でまともに進めるわけがない」
「ダンジャルさん、俺たちはそれでも行かなければならないのです」
「正気か？」
「はい、だからダンジャルさん、教えてください」
ギンリュウはその鋭い目でダンジャルを真っ直ぐ見た、そしてダンジャルは。
「・・・・・・いいぜ、他でもないお前の頼みだ、教えてやるよ」
「ありがとうございます！」
「って何でギンリュウの頼みは聞くのよ！」
ダンジャルはギンリュウ達にこの砂嵐の原因を話した。どうやら砂漠の中部に荒れ果てた施設があり、何者かがそこの施設を改装し、その施設にあった機器を使って砂嵐を発生させたらしい。
「つまり、今回の異常現象は人の手によって作られたものだと」

「正直に言うと、確かものじゃないけどな、だけど聞いた話からするとそれしか原因が思い浮かばん」
ダンジャルは肩をすくめた。リエはすこし考えてからギンリュウ達に命令をした。
「これから、その施設に行く事にしたわ」
「でも、この砂嵐じゃ、進めませんよ」
「だったら、ここは俺に任せな」
ダンジャルは自慢げに言った。
「そうか、ダンジャルさんなら・・・・・・！」
「つーか、そもそも、俺たちはディルの紹介でここに来たんじゃないか」
「お、お前らディルの事を知っているのか」
「はい、同じ部隊なんです」
「そうか、あいつは元気か？」
「いいから早く！準備をして！」
その後、小屋の外で待っていると剣を背負って宝石の首飾りをかけたダンジャルが出てきた。
「これから、お前達を運ぶ事にする」
「運ぶってどうするのよ」
「こいつを使うのさ」
見せたのは虹色に輝くレイ・クリスタルだった。
「それは移動（ムーブ）系を扱う時に必要な宝石」
「おう、細かな場所は知らないが、だいたいの場所はわかっているからな」
「よし、行くわよ！」
「「「了解！」」」」

ヘルヘブン砂漠　中部　謎の施設付近
「着いたぜ」
「・・・・・・」

「どうしたんだよ、ギンリュウ以外ぐったりしやがって」
ダンジャルの言うとおり、ギンリュウ以外の全員は顔色を悪くしていた。
「移動(ムーブ)系ってこんなに酔うものなの」
「慣れないっときついからな、さすがに同情する」
ギンリュウは辺りを見た、どうやらここ以外は砂嵐が発生していた、例えるならここは台風の目であろう。
「これが例の施設？」
リエは施設を見た、ダンジャルによるとここは元々観察所だったらしく、今では荒れ果てた施設になっていた。見た目はそんなに大きくないが最新の設備が揃っているで上にはレーダー装置やらなんやらがあった。
「とにかく、入るわよ」
ダンジャルも行動を共にするらしく、全員で施設に入った。

謎の施設　内部
施設には簡単に入れた、というよりはまるで入ってくださいばかりにセキュリティシステムは動かなかった。
「罠・・・・・・なのかしら？」
「罠でも進まなきゃ意味がありませんので行きましょう」
「そうね」
リエを先頭に扉一つもない廊下を進んだ。ギンリュウとミリアは所々にあるエンブレムらしきもの見て、深刻な顔をした。その骸骨をイメージしたエンブレムを見た事があったからだ。
「ギンくん、あれって」
「ミリアの考えている事はわかっている、多分ここは・・・・・・」
するとリエ達が止まった。
「ここが一番奥ね、ここのロックも作動していないどういう訳？」
リエが先に入ると、ギンリュウ達も入る。
「こ、こりゃ」

「なんなの？ここは？」
かなり広いフロアに様々な研究設備らしき物が揃っている。
「ギンくん・・・・・・」
「あぁ、確信したよ、やっぱりここは・・・・・・」
ギンリュウが本気で怒りを表情に出した時、一人の男の声が聞こえた。
「久しぶりだね、ギンリュウくん、ミリアくん」
「・・・・・・っ！その声は！」
「な、何なのよ？」
そして研究設備の陰から三人の人影が現れた・・・・・・。

第七話　暴走

ギンリュウは記憶をさかのぼっていた、どんなに楽しい事があろうと嬉しい事があろうと絶対に忘れない一人の男の顔を……。
「な、なんで」
ギンリュウは怒りと驚きが両方の感情が入り交じっていた。
「三年ぶりかな？私の事は覚えているかい？」
残虐な笑みを浮かべる男の名、ギンリュウとミリアは一瞬たりとも忘れない、三年前、二人で脱走した研究所の中でも一番の功績を残した男だった。
「お前はガゾーマ！」
リエ達はわからなかった、この二人の間に何があったのかを・・・・・・。
「久しぶりね、ギンリュウ、ミリア」
ガゾーマの隣にいた女性がしゃべり出した。銀髪でギンリュウ達と同様に長髪だが後ろに束ねていた、顔つきはミリアを大人にした感じであった。
「姉さん……」
そう彼女こそがギンリュウとミリアの姉である、名前はナミア。
「ギンリュウとミリアのお姉さん？」
「ふ～ん、今回は五人で来たんだ。この前、見た二人がいないや」
今度は黒い髪で前髪で片目が隠れている少年が口を開いた、顔つきはギンリュウに似ていた。
「ショウ、お前まで」
「この前って何の事よ！」
リエはショウと呼ばれた少年に聞いた。
「お前らがヒトナキの森で僕のワイバーンを倒したでしょ？」
「そうか、あれはお前が……」
「そうだよ、僕はついに弱点を克服したワイバーンを作り出せたん

だ。まぁ、ギン兄とミリア姉に倒されちゃったけどね」
　ショウは肩をすくめた。
「今回の砂嵐はお前らがやった事か！」
　アスカはガゾーマ達に向かって聞いた。
「そうだよ、大事な実験の邪魔はされたくなかったね」
「あなた達は何者なの？」
「“レックス”……」
　リエは聞く、しかし答えたのはガゾーマではなくギンリュウだった。
「“レックス”？」
「そう、私達は古の魔法及び聖鬼神を研究している者だよ」
「古の魔法？」
　リエは訓練生時代の時に聞いた事があった。大昔にあまりに強大すぎる力故に封印された魔法系統の事を。
「この前、ヒトナキの森で使ったでしょ？あれがそうです」
　ミリアが少し強ばった声でリエに言った。
「あれって、確かに見た事もない魔法だったけど」
「そう、ギンリュウくん達、姉弟にはそれぞれ違う古の魔法を使えるのだよ」
「だから、俺たちは実験体にされてたんだよ」
「古の魔法の事はわかったわ、でも聖鬼神って」
　ガゾーマはさらに残虐な笑みを浮かべ始めた。
「聖鬼神、それは古の魔法を扱う者達の事を言っているんだよ」
「僕たちは大昔に消えた聖鬼神一族の血を引く者なんだよ、まぁ、何が出るかはわからないけどね」
「俺たちにはそんなの関係なかった、なのに」
　ギンリュウは怒りを込めて言った。
「そうそう、君たちの妹の事なんだけど」
「……！」
「彼女の魔法はもう少しで目覚める、見たいかい？妹の姿」

ガゾーマは字自分の後ろにあった大きなディスプレイにギンリュウ達の妹を写した、そこには……。
「うそ、でしょ？」
「こんな事って」
「……」
ミリアは絶句してしまった、カプセルの中で生命維持装置を付けられた妹の姿を……。
「彼女は四年前の事故から未だに意識は戻らないが、順調に回復しているよ」
「あ、あぁ……」
ギンリュウもまた絶句してしまった。
「まぁ、彼女は特殊だからじっくり研究したいがね……」
「……！」
ギンリュウは思い出した、四年前の事故、妹の暴走、自分の暴走……。
「あ、アァァァァ！」
「なっ……！？」
ギンリュウは叫んだ、するとギンリュウの背中から黒い翼が出てきた。
「ギンリュウ！？」
「おい、どうしたんだよ！？」
ギンリュウは黒いオーラに包まれ、目が灰色から赤に変わり、髪も黒に変化していった。
「ま、まさか！？」
「ギンくん！」
ミリアとガゾーマは見た事があった、四年前に一度に二人の聖鬼神が自分の力が抑えきれなくなった時に暴走した姿を……。
「カエセ！ハルヲカエセェェェ！」
ギンリュウはガゾーマに向かって、グラビティ・レイを放った。
「くっ……」

「ガゾーマ様！」
ナミアはガゾーマに飛びつき、グラビティ・レイを避けた。レイはそのまま後ろのディスプレイを貫き消えた。
「え？今、唱えてなかったよね……」
リエ達は驚く、普通、魔法はその魔法の名前を言わなければその魔法は出ない、しかしギンリュウはグラビティ・レイの名前を言わずに出した。
「あれがギンくんの“古の魔法”、重力系（グラビティ）」
ミリアはギンリュウの魔法系統の名前を言った。
「そして、今、ギンくんは邪神状態になっています」
「邪神状態？」
「はい、簡単に言えば暴走している……、きゃぁ！」
ギンリュウは周りが見えていないのかグラビティ・レイをそこら中に放つ、研究機材は破壊され、壁や天井に大きな穴が空く。
「ギンリュウ！やめなさい！」
「カエセ！カエセ！カゾクヲカエセー！」
「声が届いていない……？」
ギンリュウは手の中に重力のエネルギーをためている。
「あれは！みなさん、ここから離れて！」
「え、なに？」
「まずい！」
「ガアァァァァァ！」
ギンリュウは重力の玉を空高く上げると、玉は弾け、そのまま雨のように降り注ぎリエ達を襲う。
「きゃぁぁぁ！」
「な、なんだ！？」
「きゃぁ！？」
「ナミア！」
重力の弾の一つがナミアの腕をかすめる。
「だ、大丈夫です……、それより」

ナミアは腕を押さえながらも立ち上がる。
「シネ！ガゾール！」
ギンリュウはまた新たなる魔法の準備していた。
「……！ここまですか……」
「ホーリー・クロス！」
「ミリア姉！」
その時、ギンリュウの背中に純白なクロスが当たる。
「ガァ、ア」
黒いオーラと翼は消え、髪も目も元に戻り、ギンリュウは元に戻った。
「うぅ……」
「ギンくん！」
「ギンリュウ！」
リエとミリアは倒れたギンリュウの元に向かう、ギンリュウの顔は赤くなっており苦しそうな顔をしていた。
「これは……枯渇病！？」
「邪神状態が解かれると、必ず枯渇病になるんです」
人間や魔族には魔法を使うために魔力がある、その魔力を尽きた事で高熱が発し、まともに立てなくなる状態を枯渇病と言う。
「まいりましたね、まさか、邪神状態になるなんて」
ガゾーマはナミアを抱き上げ、リエ達を方を向いた。
「ここの研究所はもうだめですね、一回本部に戻るとしますか」
「な、待て！」
「いつでも、オッケーだぜ、ガゾーマ様」
ショウはダンジャルと同じ宝石を手に持っていた。
「くそ！テレポをする気か！」
「待ちなさい、ガゾーマ！」
「リエと言ったね、君に二つ程言いたい事があるよ」
「何よ」
ガゾーマは今までの残虐な表情とは違い、真面目なのか悲しそう

な顔をした。
「この先、ギンリュウくんとミリアくんを狙う者達が現れるのならば、気を付けてほしい」
「狙う者達？」
「そう、私はこう呼んでいる、戦乙女と」
「戦乙女？」
リエは聞いた事もない事、名前を聞かされた。
「そして、どうか彼をバケモノと呼ばないでほしい」
「……？」
ガゾーマが言った意味をリエはわからなかった。あんなの見せられて、誰もギンリュウをバケモノと思わない者はまず、いないだろう。
「彼だって望んでその力を手にしたわけではないのでね、恨まれるのは私だけで十分だよ」
ガゾーマはショウに合図を送り、ショウは魔法を唱えて、三人はどこかへ消えてしまった。
「……」
リエ達はなんかすっきりしなかった。ギンリュウやミリアに何があったのだろう、リエはそんな事を考えていた。
「とりあえず、砂嵐を起こした装置は壊された事だし、任務は完了、ギンリュウの事もありますから速やかに帰還するわよ」
こうして、リエ達はダンジャルのテレポでヘリの所に戻っていった。

第八話　決心

ヘルヘブン砂漠の任務から五日、ギンリュウは枯渇病のため“ガーディアン”直属の病院に入院していたが、三日で退院した。
第十二部隊宿舎　ギンリュウ・ディルの部屋
「……」
ギンリュウは暇だった、リエにしばらく大人しくしろっと言う命令を受けたからだ。
いくら、ギンリュウがリエを嫌っているとはいえ、リエは隊長だ、逆らうわけには行かない。
「はぁ……」
「暇そうね、ギンリュウ」
「！」
ギンリュウがベットに寝転がっていると誰かが声をかけた。ギンリュウは扉の方を向いた、そこにはリエがいた。
「隊長、何のようだよ」
「そんな口をたたけるなら、調子はいいみたいね」
「おかげさまでね」
リエは近くの椅子に座り、ギンリュウの方を向いた。
「んで、もう一回聞くけど、何のよう？」
“レックス”の事、無理に言ってもらう必要はないわ」
「別に構わないよ、下手をしたらこれから関わるかもしれないからな」
ギンリュウは起きあがり、ベットの縁に腰をかけた。
“レックス”、古の魔法を知るための研究機関で、そのためなら犯罪までをも犯す集団でもあるんだ」「……」
「とはいえ、“レックス”はあくまでも知るために研究しているからな、無意味な犯罪とかはしないさ」「でも見逃せないわね」
「まぁ、犯罪を犯しているからね」

リエはもう一つ、質問をした。
「ねぇ、戦乙女って知っている？」
「あぁ、ガゾーマから聞かされた程度だけど、たしか、人工的に古の魔力を埋め込まれた女性だって聞いた事あるぜ」
「なんで女性なのよ」
「さぁ？」
ギンリュウは肩をすくめた。
「でも、なんで戦乙女の事を聞くんだよ」
「えっと……」
「まぁ、大体察しは付くけど」
ギンリュウは頭をかきながら立った。
「戦乙女には気を付けろか。まぁ、あいつの言う事は俺ぐらいしかわからないだろうけど……」
「……？」
ギンリュウは意味深い顔をした。リエはなんでギンリュウがそんな顔をしたのかわからなかった。
「ねぇ、ギンリュウ」
リエは少し遠慮しがちにギンリュウに聞いた。
「なんだよ」
「ミリアから、あなたは重力系（グラビティ）を使うと聞いたわ」
「じゃ、ミリアは何を使うかって聞きたいのか？」
リエは頷いた。ギンリュウは窓の方を向いた。
「ミリアは聖力系（ホーリー）を使う、そしてこの前会った、姉さんが爆裂系（バースト）、ショウ、俺の弟だが、あいつは闇力系（ダーク）を扱える」
「あなたの妹さんは？」
「ガゾーマは隕石系（メテオ）を秘めているって聞いた」
「聞いた？」
「俺とミリアが“レックス”の研究所を脱出したときには、あいつはあの状態だったからあまり見た事がないんだ」
「四年前の事故ってやつ？」

ギンリュウはリエの方を向いて、黙って頷いた。
「正直な所、俺も関わっていたらしいんだけど覚えていないんだ」
「……？」
「後で聞いた話、俺とハルはお互い、魔法の検証していたときに暴走したらしい」
「それで？」
「俺はミリアのおかげで助かったらしい、けど……」
ギンリュウは悔やんだ顔をした。しかしすぐにその顔やめて、いつもの顔に戻した。
「……ヘルヘブンでの任務、俺、暴走しただろ」
「えっ……！？」
リエは驚いた。
「覚えてなくてもわかる、いつの間にか病院にいたし、誰に聞いても省かされた辺りとかな」
「……」
「悪いけど、俺は勘がいいんだ」
「そう」
リエは顔をうつむく、ギンリュウの顔が見れない。
「別にバケモノって思っても構わない」
リエはますます、ギンリュウから背いた。ガゾーマの言葉がリエの脳裏をかけていくためでもあろう、「彼をバケモノとは呼ばないくれ」、この言葉をリエは忘れる事ができない。
「別に、あなたは私以外は仲がいいし、誰も貴方の事をバケモノとは思わないわ」
「……！」
ギンリュウは驚いた、てっきりリエにはバケモノ扱いされるであろうと思っていたからだ。
「あなたは人間、ただ他の人と違う能力をもっているだけの人間よ」
そう言って、リエは部屋を出る。
「あ、そうそう、明日から掃除とかやってよね」

「……了解、隊長」
ギンリュウは微笑んだ、リエはギンリュウの顔を見て思わず真っ赤になった。
「わ、わかればいいのよ、わかれば」
そう言ってリエは自分の部屋へと戻った。
（ありがとう、隊長、俺はもう暴走しない、自分のせいで人を傷付けたくないから……）
ギンリュウは心の中でそう決心した。

レックス研究所　ガゾーマの研究室
「ナミア、腕の怪我はどうかな？」
「すこぶるいいです、ガゾーマ様」
ガゾーマは回復液に満たされたカプセルに入っているナミアに声をかけた。
「すまない、私があんな事をしなければ、ギンリュウくんは暴走しなかっただろうし、君も怪我はしなかっただろう」
「それは言わない約束です」
「そうだったね……、そろそろいいだろ」
ガゾーマは隣にあった装置を操作し、カプセルにあった回復液はなくなり、カプセルは開きナミアは出てきた。
「……」
ナミアは本調子ではないのか、立とうとするとふらつく。
「大丈夫か、ナミア」
「はい、ガゾーマ様」
「重力系（グラビティ）を少しかすめただけでここまで体力を奪うとはな」
ガゾーマは近くにあったタオルをナミアにかける。
「君はすぐに部屋に戻りなさい」
「しかし……」
「いいから、戻りなさい」
「わかりました……」

「それでいい」
ガゾーマは通信機を手にした。
「誰でもいいからすぐに来てほしい、ナミアを部屋まで送ってもらえないか？」
『了解しました』
通信がきれると二人の警備兵がナミアを支え、研究室を出た。
（……戦乙女、古の魔法を兵器として扱う、そんな事はさせん！）
ガゾーマは古の魔法のデータを見始めた。
ギンリュウとガゾーマ、二人の決心はこれから何を生むのか……。

第八話　決心（後書き）

これで第一章は完結です。

ギンリュウ・スペイエル（前書き）

久しぶりの更新です。
第二章の前に主要人物とこれから重要人物となるキャラクターを紹介したいと思います。

ギンリュウ・スペイエル

年齢・１９歳　身長・１７８？　体重・６８？　目の色・灰色　髪の色・銀

第十二部隊に所属している青年、腰まである銀色の長髪で目つきが鋭くクールな印象がある。性格は冷静だがケンカ早っく、何事にも口に出さないと気が済まない素直、頑固な一面もある性格の持ち主である。

自然観察が趣味で“ガーディアン”に入る前は毎日、出かけていた、そのために自然に関する知識が優れている。義両親は“ガーディアン”の教官であり、ミリアに関しては育成学校に通っていたため、家事や料理などはギンリュウがやっていた。そのため、ミリア曰く「ギンくんがお母さんみたいな存在」っと言っている。

古の魔力を扱う聖鬼神だったためにレックスの研究所にいたがミリアと共に脱走、脱走した理由はミリアにもわからないが、本人曰く「あそこにいるのが嫌だった」らしいが本当のところは不明である。

使える魔力は重力（グラビティ）と強化（ゲイン）、武器は大剣「アースバーン」。

リエ・マレンデカル（前書き）

次に紹介するのは隊長です。

リエ・マレンデカル

年齢・２１歳　身長・１６８？　体重・４７？　目の色・焦げ茶
髪の色・黒
第十二部隊の隊長、１６歳で育成学校を首席で合格した天才で統括力、武力、学力共に高い。性格は若干ひねくれており、素直ではないが、根は心配症である、男性不信であるため部隊は女性が多いが同性愛ではない、どうして男性不信なのかは不明である。目つきは鋭いがギンリュウよりは少し幼い顔つきをしている、髪型は赤いリボンでサイドポニー。
男性嫌いのためにギンリュウやディネカルなどに庭掃除などをやらせているが、この如く逆らうギンリュウとはかなり仲が悪く、ケンカばかりしている。隊員曰く「あの二人はケンカするほど仲が悪くなっている」との事である。
ギンリュウが一番嫌いだが、剣術と自然に関する知識の豊富さは感心している。任務に私情を持ち込まない主義であるが、ギンリュウと任務行くと感情丸出しになる。
使える魔力は回復（キュア）と火炎（フレイム）、氷結（アイス）等、武器は剣「エクソシスター」。

ミリア・スペイエル（前書き）

次は主人公の妹です。

ミリア・スペイエル

年齢・１９歳　身長・１５９？　体重・４５？　目の色・灰色　髪の色・銀色

第十二部隊に所属しているギンリュウの妹、育成学校を首席で卒業しており、武力はそこそこだが学力と魔力が突発して優れている、ギンリュウと同様、古の魔力を扱う聖鬼神の一人である。髪がギンリュウより少し短く、黒いリボンで一つにまとめている。顔つきは少しおっとりしている印象がある。

性格はかなり天然だが心優しく、誰とでも親しまれる性格である。

家事などは苦手ではあるが料理はギンリュウと共にやっていたため得意である。

趣味は服のコーディネイトで、よくリエの服を選んでいたりしてあげたりしている。かなりセンスが良く、部隊から結構コーディネイトを頼まれたりしている。

ギンリュウと共にレックスの研究所を脱走したが、理由はギンリュウと同様で不明である。

使える魔力は聖力（ホーリー）や回復（キュア）等、多彩である、武器は杖「水晶の杖」。

ガゾーマ・バラディルカル（前書き）

フルネーム初公開だ……。っというわけで今のところは敵の親玉です。

ガゾーマ・バラディルカル

年齢・２８歳　身長・１８５？　体重・６３？　髪の色・白髪混じりの黒　目の色・水色

研究機関“レックス”の現機関長、ギンリュウとは深い因縁で結ばれている関係でもある。前髪は上げており、後ろでまとめている。年齢の割にはかなり老け顔で目つきはかなり冷たい。常に白衣で身を包んでいる。実はかなりの剣の腕の持ち主でもある。

性格は冷酷で残酷と言われているが、本当の所はわからなく、つかみ所のないひょうひょうとした態度もとる。約八年間、ずっと古の魔力を研究してきたため、かなり知識を蓄えている。古の魔力を知るためなら犯罪をも犯すが、あくまでも知るためであって兵器としては扱わない、むしろ嫌いでギンリュウ達が脱走した際に、兵器として見ていた研究員を一人殺している。

使える魔力、武器共に不明である。

ディネカル・アークソン（前書き）

最後の紹介です。

ディネカル・アークソン

年齢・１７歳　身長・１５４？　体重・４７？　髪の色・薄い黄
目の色・茶
第十二部隊に配属させれた少年、愛称は『ディル』、年齢の割には身長が低く幼い顔つきとなっている。格闘術を得意としており、爪の付いた小手と靴を愛用している。身長が低いのかなり気にしている模様である。髪は全体に短すぎず長すぎない程度の長さである。性格は少し臆病ではあるが仲間思いであり、怒るとどんなヤクザよりもめちゃくちゃ怖いらしい。ギンリュウとは部隊の中で部屋が同室である事もだが、一番仲がいい。
手先より足の方が器用で育成学校の頃は部活でサッカー部をやっていた、リフティングがかなり得意らしく２００回以上は平然とやってのける。そのため戦闘の際には拳技よりも蹴り技の方をよく使っている。
孤児院育ちで両親は行方不明、現在は育ててくれた神父が父親代わりである。
使える魔力は強化（ゲイン）と弱体（ロウ）、武器は格闘補助「マーズウルフ」である。

ディネカル・アークソン（後書き）

次で第二章が始まります。

第九話　休暇（前書き）

第二章突入！でもこの話は番外編だと思ってください。

第九話　休暇

ヘルヘブン砂漠での任務から三週間、今日から一週間、第十二部隊は休暇になる。“ガーディアン”は部隊をいくつかのグループに分け、二ヶ月に一回、一週間の休みをもらえる。

ギンリュウは自分の部屋で寝ていた。

「ん、んん……」

窓から入る日差しはギンリュウの顔にかかる、まぶしくとてもではないが寝てはいらない、というよりは暑くって眠気が妨げる。

「うぁ……？」

ギンリュウは目を覚めた。

「今、何時だ？」

ギンリュウは机の上に置いてある“ゼローム”で時間を確かめる。午前１０：００っと画面に映し出された。

「……起きるか」

ベットから降りると、普段の戦闘服とは違い、私服に着替える。灰色のＹシャツに紺色のズボンをはく、髪も普段はまとめないが白いリボンで一つにまとめる。

「ディルは……、食堂か？」

ギンリュウは部屋を出る、すると隣の部屋もドアが開き、誰かが出てくる。私服姿のリエだった。

「「あ……」」

思わず声が被ってしまった。ギンリュウは嫌いのはずのリエの格好にみとれていた。リエは黒のワンピースに白の薄い上着を着ている。

「な、何よ……」

「あ、いや、なんでもない……」

どうやらリエも普段見ないギンリュウの私服姿にみとれていたらしい。

「「……」」
そのまま、二人は一緒に一階にある食堂に向かった。
食堂に入るとディルとミリア、そしてアスカの妹であるリリを含む五人しかいなかった。
「あらルエとアスカは？」
「バーシュさんもいない……」
ギンリュウはまだ眠いのかあくびをしながら背伸びした。
「あの三人なら、この前の任務を報告ついでに飲みに行くって言ってましたよ」
「……あの二人はともかくバーシュさんは意外だわ」
「そう言う隊長は飲まないのか？」
ギンリュウは目を半目にして言った。
「……ない」
「はい？」
「どーせ、飲めないわよ、私は！」
「逆ギレしないでくれよ……」
「最近のギンリュウさん、隊長の扱いに慣れてる……」
リリは冷静に物事を見ていた感想を言った。
「しかし、七人だけかぁ……」
「あのさ、俺、自然観察に……」
「よし、デパートに服やら何やらを買いに行くわよ！」
「俺の話を聞けよ」
リエはギンリュウの意見も聞かずにデパートに行く事になった。

ベーゼル中心部　コーレルデパート
コーレルは世界有数のデパートでかなりの品揃えと価格の安さが売りらしい。
「さぁーて！買い物しまくるわよ！」
「おぉー！」
リエとミリアはかなりはしゃいでいる、リリと他の三人もミリア

達程ではないがかなり気分が浮いているようだ、でギンリュウとディルは……。
「俺たち、ぜってー荷物持ちだろうな」
「まぁ、いいじゃないですか？」
「だな、とりあえず俺たちは別行動だ、荷物持ちは面倒でやだ」
「同感です」
ギンリュウとディルはさっさとリエ達とは別の方向に行ってしまった。
「さぁ、ギンリュウ！ディネカル！荷物持ち、よろし……」
「あの二人なら、別行動するって言ってました」
「ふつーそうなるわよね」
「……あいつらー！」
リエは憤慨してしまった、ミリアはリエを押さえつけ引きずるように自分たちの目的である物が売っている売り場に向かう。
一時間後……
「とりあえず、お互い買いたいもんも買ったし、隊長達と合流するか」
「ええ、そうですね」
ギンリュウは“ゼロローム”を取り出し、ミリアにかけた。
『はいはい、まっててギンくん』
「ん？なにをやっているんだ？」
『いやぁ～、隊長をもう少しかわいくできないかなーって試行錯誤しているところ』
ギンリュウは呆れてしまった、ミリアの趣味は服のコーディネイトだ。昔、一度だけギンリュウも無理矢理させられた事がある、少女趣味満載の服装だったため、ギンリュウに深い心の傷を付けた。
「あまり、無理させるなよ。俺たちはそっち向かうからな」
『うん、了解』
っと言って通信が切れる、ギンリュウ達はミリア達がいるところに向かった。

「あ、来ました」
リリはギンリュウとディルを見つけると手を大きく振った。
「あ、いましたね」
「あいつら、買い物するだけしやがって……」
すると試着室からミリアが出てきた。
「あ、ギンくん、ちょうど良かった」
「あ？」
「今ね、隊長のコーディネイトが終わったところなのよ」
「ぬおっ、何するんだよ！」
ミリアは満足げな笑顔でギンリュウを試着室前に引っ張り出した。
「隊長、ギンくんを連れてきましたから、開けますね」
「ちょ、ちょっと待って、これをギンリュウに見せるわけ！？」
試着室からリエの声が聞こえる。
「見せるためにコーディネイトしたわけですから」
「おい、あくまで店の物だろ？」
「大丈夫、買ったから」
「「「買ったんかーい！！」」」
あらゆる所からツッコミがきた。そしてギンリュウ曰く「ありがとうございます」らしい。
「とりあえず、開けるね隊長～」
「ま、待って……」
「オープン！」
ミリアが試着室のカーテンを開ける、現れたのは白をメインとしゴスロリ風の服装のリエだった、年齢の割には幼い顔をしているのもあって、意外に合っていた。
「あうう……」
「隊長、かわいいですよ」
リリは目を輝かせる。
「本当に似合っていますよ、ね、ギンリュウさん……」

ギンリュウはぼぉーとしている、顔を真っ赤にしながら。
「あのーギンリュウさん？」
「え、あ、なんだ？」
「いや、今ぼぉーとしていたような……」
「ん、んなわけないだろ！なんで俺が隊長にみとれないといけないだ！？」
「いや、そこまで言ってないし……」
「あ……」
ギンリュウはさらに顔を真っ赤にする。するとリエがギンリュウの前に立つ。
「いーい、これはみ、ミリアが無理矢理、着せられた物で、別に、その……」
リエは顔を真っ赤にする、別の意味で……。その時ミリアがリエの後ろに立ち、トンっと背中を押した。
「きゃぁ！？」
「え、ちょっ！？」
リエはギンリュウに抱き付き、一緒に倒れた。
「……」
「……」
今の二人の状況見れば、誰もが勘違いをするであろう。倒れたギンリュウの上にゴスロリ姿のリエが抱き付いている状態は見る者を恥ずかしくさせた。
「いやー、隊長さん、大胆ですね」
「ねぇー」
「最近、お二人がお似合いだと気づきました」
「あ、それ私も思った！」
「私もー」
そんな隊員達の言葉は二人の耳には届いていない。
「あ、あのさ」
「……なに」

「そろそろ、どいてくれないか？」
リエは顔をさらに真っ赤にさせて、上体を起こした。
「う、あ」
「……？」
「いやぁぁぁぁぁぁ！！」
その叫びはそのフロアに響き渡った……。

夜　第十二部隊宿舎
「「ただいまー！」」
「今、帰ったぞー」
しっかりと酔って帰ってきた三人は食堂の異様な空気に気が付いた。
「なんだ？この空気……」
事情の知らない隊員達は疑問に思っていた。
「そっちに行って……」
「無理……」
ギンリュウとリエの席が隣だった、もちろん、これもミリア達の作戦だが……。
「まぁ、少しは仲が良くなったのか？」
「だろうな」
こうして、第十二部隊の休暇一日目の夜がふけていく。

第九話　休暇（後書き）

なんだかラブコメみたいな話になってしまいました。次からは本筋に入ります。

第十話　ドゥアール神殿、古の遺跡（前書き）

やっと更新できました。今回はセリフが片言で読みにくい所があります、すいません。

第十話　ドゥアール神殿、古の遺跡

休暇が終わって二日、ギンリュウは今、リエとディルとアスカでナチュリコム南東にある熱帯林地帯のハブル川を三隻の船で目的地に向かっていた。

「いやー、すまないね、こんな辺境に連れ出してしまって」

「いいえ、これも“ガーディアン”の仕事ですから」

リエは顔は笑顔になっているが、内面ではすこぶる機嫌が悪かった。理由は一緒に乗っている調査団が原因だった、この人達はこの森の奥に行きたいらしく“ガーディアン”に護衛の依頼を頼んだらしく、その任務が第十二部隊にきたっと言う事だ。調査団の七人内の約二名（言ってしまえばフードを被っているため性別が判断出来ない）を除いて全員が男だったため、男嫌いであるリエが不機嫌になるのもしょうがなかった。

「この森は前々から魔物が出るから危険だと聞いていたからね……」

「へぇー、では何故、このような危険な森に？」

「実はこの森の奥に遺跡があるのですよ」

ギンリュウはそれを聞いて反応した。

「遺跡？まさかドゥアール神殿の事ですか？」

「ドゥアール神殿？」

「ほう、あそこをご存じでしたか」

ギンリュウによると、ドゥアール遺跡は古来の文明があった形跡があるらしく、ギンリュウ自身も二回ほど入り口辺りまで来た事があった。中には濃密な魔力が充満しているらしく、そのせいで強力な魔物がうようよいるっと先住民達から聞いたらしい。

「あそこに行きたいなんて、怖いもの知らずですね」

「はっはっは、あそこは過去を知るのに必要な遺跡だからね、調査員としては一度は行ってみたい所ですよ」

「そうですか……」

ギンリュウは好きこんであそこに行く人の気持ちがわからくはない、まだあそこは未調査部分も多く残っており、うまくいけば世紀の大発見になるかもしれないからだ。
「隊長！魔物が来ました！」
「ギンリュウ！ディネカル！戦闘態勢に入って！」
「「了解！」」
来たのはミツノメチョウという、三つの目と四枚の羽で漆黒の羽毛に包まれた怪鳥にしては小さい魔物だった。
「くそ！船だと安定しない」
「はぁぁ……」
するとディルは船からミツノメチョウに向かって飛び、一匹を全力で他のミツノメチョウにむかって蹴りつけて。剛速球と化したミツノメは他のミツノメにぶつかって、二匹とも川に落ちてしまう。ディルはそのまま船に着地した。
「よし！」
「すごいな……、ディル」
「ギンリュウ！よそ見しないで」
「あ、あぁ、すまん」
ギンリュウは再び戦闘態勢に入る、そして、ミツノメチョウの群を倒しきった。
「ふぅー、なんとかなったな」
「なんとか、ねぇ」
リエはディルが乗っている船を見た。
「あいつって、あんなに強かったの？」
「さぁ、俺もよくわからないけど、ミリアによれば、あいつは相当強いらしい」
「ふ～ん」
数時間後、遺跡にほど近い村に着いたギンリュウ達は村長に会いに行った。
「バスカルさん、お久しぶりです！」

「オオウ、ギンリュウ！オ久シブリネ」
上半身は裸で肌は黒色で長身で白いメイクを顔にほどこしたバスカルという村長は槍を使わせば村一番と言われいる、言葉はめっちゃくちゃ片言だが……。二人は握手を交わし合い、リエと交代した。
「“ガーディアン”ナチュリコム支部第十二部隊隊長、リエ・マレンデカルです」
「ワタシ、コノアーソル村ノ村長、バスカルネ、ヨロシクネ」
早速、リエは今回の目的を話した、調査団がドゥアール遺跡を調査したい事、そして護衛のためにギンリュウ達は来た事を。
「ウーン、アマリ賛成ハデキナイ、アノ遺跡、トテモ危険ダカラネ」
「そこをなんとかできませんか？」
「デハ、必要イジョウニ荒ラサナイヨウ、ワタシガ監視デツイテイキマス」
「本当ですかありがとうございます！」
「バスカルさんがついてきてくれるなら助かりますよ」
「また、男が増えた……」
リエはさらに不機嫌な顔をした。
「どうした、隊長？」
「なんでもないわ！」
ギンリュウはなぜか申し訳ない気持ちになってしまった。

ドゥアーク神殿　入り口
「ここがドゥアーク神殿……」
リエは圧巻した、入り口の両脇に置かれた石像の大きさ、そしてここにいてもわかる濃密な魔力がここまで漏れている。
「なんて、魔力なの……」
「オカシイデスネ」
「あぁ、どういう事だ？」
バスカルとギンリュウはどうやら不審を感じた。
「どうしたの二人とも？早く行くわよ！」

「あ、おい！隊長！」
「ギンリュウ、慎重ニ行キマショウ」
「わかった」

ドゥアール神殿　内部一階
「おぉ！これが古の文明が残した遺跡ですね！」
「中に入ったら、またすごい魔力ね」
「……」
ギンリュウとバスカルは不思議に思っていた、あれだけ魔力で魔物が一匹もいない。
「ここは、まさしく歴史の宝庫だよ！」
「たしかにすごいですね、なんて言うか……」
「って言うか魔物なんて一匹もいないじゃない、少しがっかりしたわ」
「いや、異常だよ」
リエが不満をこぼすと、ギンリュウは鋭い目で真面目な顔で言った。
「どういう事よ？」
「ソモソモ、外二魔力ガアフレイル自体ガ異常ナノデス」
「えっ？」
「おい、一つ聞いて良いか？」
「はい、何でしょう？」
ギンリュウは浮かれている調査団のリーダーに質問した。
「お前らは何者だ？」
「なに、言っているのギンリュウ」
「隊長は黙っててて」
リエはギンリュウが何か悟った事に気が付いた。
「……どこで気づいたのですかな？」
「最初は何にも不信に思わなかったさ、だけど気になる事が二つ」
ギンリュウは指を二本を立てた。

「一つ、遺跡に異変が起こっている事、そして……」
ギンリュウは一つの指を畳んで言った。
「二つ、そこにいるフード野郎の気配が俺に似ている事だ」
「似ている？」
リエはガゾーマの言葉を思い出した。
（戦乙女には気を付けて……）
「まさか！」
リエも何か気づいた、すると調査団のリーダーは不気味な笑みを浮かべた。
「くっくっく、気が付いたようだな……」
「お前ら、まさか……」
ギンリュウはさらに目つきを鋭くなる。
“バジリスク”か……？」
「その通りだよ、そして彼女達が……」
彼女達、フードを被った女性達はついにフードをはずす。
「戦乙女なのさ！」
一人は黒髪のポニーテールで目つきが鋭い、もう一人は金髪のセミロングでクールな目つきをしていた。
「初めまして、聖鬼神」
「あらー、いい男じゃなぁい」
「へ～、俺の事を知っているんだ光栄だね」
ギンリュウは“アースバーン”を取り出す。
「メアル、行くわよ」
「はい、ディーン」
そして、戦いは始まる……。

第十話　ドゥアール神殿、古の遺跡（後書き）

さて、次回、よいよ戦乙女との戦闘です。

第十一話　対決・戦乙女！（前書き）

いよいよ、戦闘開始です。
間違いがあったので訂正しました。

第十一話　対決・戦乙女！

ギンリュウは幼い頃、ガゾーマから教わった。この世には古の魔法を兵器として扱う奴らがいると、そしてその組織の名前も……。

「“バジリスク”……」

ギンリュウはそう言った。ギンリュウとミリアがいた“レックス”は犯罪をするが、それはあくまで知る事であり、兵器として扱わず、むしろ人間として普通に接してくれた。しかし“バジリスク”は違う、古の魔法を兵器として扱う、その目的は不明。

「まさか、こんな所に出会うなんて、な……」

「そんな事はどうでもいいです、私は私の任務をするだけです」

「ギンリュウ……」

リエは不安になった、今回の任務は護衛、しかしその護衛すべき人達はギンリュウにとって敵、いや“ガーディアン”や世界の恐怖の対象にもなるだろう。

「どうしたんですか？隊長、らしくないな」

「なっ……！」

ギンリュウは皮肉ぽい言葉を言った、リエはむかついて剣を抜いた。光り輝く刃は誰であろうと惹きつけるだろう、その剣の銘は“エクソシスター”。

「うるさいわね！ディネカル、アスカ、戦闘態勢！」

「「了解！」」

「ワタシモ闘イマス！」

バスカルとアスカは槍を構え、ディルも構えた。

「では私たちはもっと奥に行き、調べるとしましょう、ここは任せましたよ」

「了解……」

「ふん、勝手にすれば？」

「では……」

「待ちなさい！」
リエは奥に行こうとする調査団を追おうとするとギンリュウが制する。
「目の前の敵が許してくれなさそうだぜ」
「ちっ……」
「まぁ、あいつらが無事で済むかどうかは別だが……」
「ソウデスネ」
その時、奥から悲痛の悲鳴が聞こえた。
「やっぱり」
「なーにごちゃごちゃ言っているのよ、来るの来ないの？」
「来るに決まっているだろ！」
ギンリュウはディーンと呼ばれた戦乙女に飛びかかる。
「おりゃぁぁぁ！！」
「我を守りたまえ！バース・シールド！」
ギンリュウは“アースバーン”を思い切りディーンに斬りつけようとする、がそれは弾かれた。防衛（シールド）系の魔法だ。
「くそ！」
ギンリュウは素早く体勢を立て直して後ろに下がる。
「はぁぁぁ！！」
「てやぁぁぁ！！」
リエとディルはメアルと呼ばれたもう一人の戦乙女に飛びかかる、メアルはかなりのスピードで後ろに下がり、二人の攻撃はかすりもしなかった。
「今度はこっちから行くわよ！」
ディーンは手の中に火球を生み出す。
「炎系の魔法？古の魔法ではない？」
しかし、リエの思考は完全に否定される事になる。
「バースト・ボム！」
火球は真っ直ぐギンリュウに向かう。
「まずい！だけど……、グラビティ・レイ！」

ギンリュウは火球を消し、さらにディーンに攻撃をしようとする。
「くっ……！」
ディーンは横に飛ぶがグラビティ・レイはかなりの横幅で避けきれなかった。
「きゃぁ！？」
だがディーンは吹き飛ばされながらもすぐさま体勢を立て直す。
「さすがに天然の古の魔法ねぇ、あの人がほしがるわけだ」
「かなりの威力です、マリンよりも数十％上ですね」
「よそ見していいのかしら？」
「……！」
リエはメアルの後ろに回り込んでいた。
「甘いですね……」
リエは剣を素早く振るが、メアルはしゃがみの際に回し蹴りを食らわした。
「きゃぁ！」
「隊長！」
「あなたもよそ見していいのかしら？」
「！？」
ディーンはギンリュウの顔に手をかざす。
「消えろ！目障りな聖鬼神よ！バースト……」
その時、バスカルがディーンに体当たりをした。
「ぐぅ……！」
ディーンは倒れた。
「大丈夫カ、ギンリュウ？」
「バスカルさん、助かりました」
「モンダイハナイ、シカシ、コイツラハ強敵ダ」
「わかっているわ！」
答えたのはギンリュウではなくリエだった。
「隊長！ディネカルが……」
「ディル！無茶をするな！」

「はぁぁぁ！」
「遅い……」
メアルはディルの首を掴んで、壁に押しつけた。
「ぐわぁ」
その時、誰もが予想しえない事態が発生した。
ガゴッ
「へ？」
「……？」
ディルが押さえつけられた壁が倒れる、すると勢いでやっていたメアルはそのまま前のめりになってしまい、倒れた壁から現れた急な坂にディルと共に入ってしまい、そのまま滑ってしまった。
「うわぁぁぁ！？」
「……！？」
「ディル！」
「メアル！」
そして、その時神殿が揺れ始めた。そしてギンリュウ達の足下が崩れ始めた。
「な、何？って、へ？」
「嘘だろ？」
「なんだと！」
「コレハ……」
「なっ！」
ギンリュウ達はそのまま、落ちてしまった。
「わぁぁぁぁぁ！！」

ドゥアール神殿　下層
ディルとメアルはそのまま滑り落ち、かなり下層の所まで来てしまった。
「いてて……」
ディルは頭をさすりながら上体を起こそうとする、しかし何か上

に乗っているのかうまく起きあがれない、そしてぼやけていた視界が徐々にはっきりしてきた。
「えっ……？」
「……？」
上に乗っかっていたのはメアルだった、しかもすごく顔が近い。
「う、うわぁ！？」
「……！」
二人は思わず、飛び退いた。いくら敵同士とはいえ男と女、少しは驚く。
「……」
「……」
二人は黙りこくってしまう、そして先に口を開いたのはディルだった。
「と、とりあえず、ここから離れよう」
「……？」
メアルは頭を傾げた、さっきまで敵同士、普通ならここでも戦うんだと思っていた。
「ここはたぶん一人じゃ、脱出できない、だから協力するんだ」
「……わかりました」
（あ、やっと口を開いた）
「今回だけ、協力しましょう」
「あ、ありがとう」
メアルは立ち上がろうとするとうっとうめき声を上げた。
「大丈夫？」
「どうやら、足を怪我したようです」
ディルはすこし考えた、そして……。
「僕の背中に乗って」
「な、何を言って……！」
「君を置いていけない、だから君をおぶる」
「しかし、私は……」

「敵だから？関係ないよ」
ほら乗って、といいディルはメアルに背中を向ける。いつものメアルなら攻撃を加えるだろう、しかし何故か、彼を信頼し、背中に乗る。
「じゃ、行こうか」
「はい……」
敵に助けられた事ないメアルにとって、ディルは自分の中で不思議な存在となっていた。

第十二話　古の魔法の神殿（前書き）

かなり遅くなってしまい、すいませんでした。では第十二話をどうぞ！

タイトルを変更しました。

第十二話　古の魔法の神殿

ドゥアール神殿　下層　？？？
「ぬわぁぁぁぁぁ！？」
「きゃぁぁぁぁぁ！？」
ドスンとギンリュウとリエが落ちる、どうやら他の三人と離ればなれになってしまったようだ。
「いてて、ここはどこだ？」
「知らないわよ、っていうかなんであんたのわけ？」
「それは俺のセリフだよ」
「で、どうするの？」
リエは話を切り替えた、いつまでもケンカするわけにはいかないと思った。
「そうだな、とにかく行ける道は一本だけ、そこを進むしかない」
「隠し通路の可能性は？」
リエは当然の事を言った。
「あったとしても、たぶんさらに下層に行かされる可能性がありますが？」
「確かに……」
ギンリュウは一本道を見つめる。
「ギンリュウ！？」
リエはギンリュウの目が赤くなっている事に気が付いた。
「え、あぁ、大丈夫だ、問題はねぇ」
「そう……」
リエは少し安心した、
「たぶん、ここの魔力は古の魔法を強化する魔力なんだろうな」
ギンリュウは辺りを見回す。
「どうして、そう思うの？」
「さっき、グラビティ・レイを使った、今までより強力になってな」

「つまり魔力自体が増幅されたって事？」
「さぁ、でも邪神状態ではないから、大丈夫だ」
ギンリュウは肩をすくめた、そして二人はこのままでは埒があかないと思い歩き始める。

ドゥアール神殿　下層　？？？
「……」
「……」
ここに残り三人がいた、アスカとバスカル、そしてディーン。
「あなた達、何故戦わない」
「ココ、危険、ダカラ協力」
「その片言の言葉は止めろ、一応あなたの言葉ぐらい理解出来るわ！」
「まぁ、落ち着いてください」
「あなたは落ち着きすぎ！？」
順応性がありすぎるわ！っとディーンの叫びはほっといて、二人はつかつかと進む。
「あ、待って、置いていかないで」
ディーンは二人の後を追う。
「しかしここまで、高度な文明があったとはな……」
「私も知らなかったわよ、私とメアルはただあのくず共に連れてこられたんだから」
「バスカル殿は何か知らないか」
「ワカッテイル事ハ一ツダケ、ココハ古ノ魔法ニ関スル遺跡」
「古の魔法だと！」
アスカは驚いた。
「ハイ、ナンデモココハ聖鬼神ニ絶大ナ力ヲ強化スル」
「強化……」
アスカはギンリュウの事を思い浮かべた、彼は聖鬼神、絶対に強化されているはず。

「後、特徴トシテハ強化サレタ者ハ目ガ赤クナル」
「目が赤くなる？」
二人はディーンの方を向いた。
「な、何よ」
ディーンの目の色は赤になっていた。
「ディーン殿の目の色は何色ですか？」
「突然何よ、紫よ紫」
「今、目ノ色ガ赤ニナッテイル」
「え？」
ディーンは手鏡を出して、自分の顔を見た。
「本当に赤になっている」
「どうやら、強化されてしまったようね」
「言っておくけど、私は古の魔法は使わないわよ」
「「へぇ？」」
バスカルとアスカは驚いた。
「私は無理矢理、埋め込まれただけよ、だから出来る限り使いたくないの」
「無理矢理？」
「他の奴らはどうだが知らないけど、少なくとも私とメアルは無理矢理埋め込まれた」
ディーンは苦い顔をした、まるで主人に怯える犬のように……。
「そのメアル殿とは一体……？」
「親友よ、たった一人のね、私とメアルは孤児でね、もはや親友よりは姉妹って感じでね」
「……一ツ、聞カシテホシイ」
バスカルはディーンにある事を聞こうとした。
「何よ」
「ギンリュウ、言ッテイタ、アナタ達ヲ“バジリスク”ト……」
「で、それで」
「“バジリスク”トハ、何デスカ？」

それはアスカも思っていた事だった。戦乙女と“バジリスク”、この二つのは絶対に繋がりがあると思った。
「“バジリスク”はあの聖鬼神がいた“レックス”から離れた研究員達が作り上げた組織らしいわ」
「“レックス”かぁ……」
「発足は三年前、双子の聖鬼神が逃げ、一人の研究員が殺された事から始まったのよ」
「双子の聖鬼神？」
アスカは双子の所で反応した、ギンリュウは聖鬼神で、双子の妹、ミリアも聖鬼神だ。
「ま、まさか、その双子って」
「そう、あなたの仲間であるギンリュウとその妹らしいわね」
「さっきから疑問詞ばかりね」
「まぁ、私もメアルも二年前に入ったばかりだから」
「二人共、オ喋リハソコマデラシイデス」
アスカ達の目の前には魔物が一体、どうやら上級のようだった。
「そうですね、一気に片を付けましょう」
「敵でも賛成ね」
三人はそれぞれ戦闘態勢に入る。

ドゥアーク神殿　下層　ディル・メアル
「良かったね、乗せてもらえて」
「え、えぇ、そうですね」
メアルが乗っかっているのは魔物の上級である、魔獅子の一種、破壊獅子（ブレイク・レオン）だった。
（この魔物を一気に従えるなんて、この人は何者……？）
「どうしたの、メアルちゃん」
「……ちゃん付けはやめてください」
「だって、年齢は同じなんだし……」
「だったら余計です！」

メアルは顔を真っ赤にしながら言った。
「しかし、あなたは何者なのですか……、いくら“ガーディアン”でもこの魔獅子の中でも最上級の破壊獅子（ブレイク・レオン）を従えるなんてあり得ません」
「え、ありえないの？」
メアルは呆れた顔をした、魔物は絶対に人間や魔人に従わない、たとえ自分よりも強い者であってもだ。しかし、ディルは魔物の中でも上級種族でその中でもさら上級の破壊獅子（ブレイク・レオン）を従えてしまった。
「まったく、本当に謎ですね、あなたは」
「うーん、今まで気にしていなかったからなぁ」
「……」
「でも、おかげで強いボディガードができて良かったじゃん」
「確かにそうですが……」
ここまで強いボディガードは他に絶対にないだろう、それぐらい破壊獅子（ブレイク・レオン）は強かった。
「とりあえず、みんなと合流しないとね！」
「……ハイ」
メアルはしっかりと破壊獅子（ブレイク・レオン）のたてがみを掴んで、二人は出口を目指した。

ドゥアーク神殿　中層　ギンリュウ・リエ
ギンリュウとリエはとりあえずは上へと上がり、再び散策していた。
「しかし、ここまで凝った作りをしら神殿は見た事ないぜ」
「しかも、ここは遺跡でしょう？なんで灯火があるのよ？」
「わからん」
そう、ここは誰も中に入った事のない神殿であり、普通なら灯火はついていないはず、しかし、ここは入った時から灯火があった。
「ってなんでここまで魔物がいるかなぁ～」
二人の目の前に現れたのは上級種族の一つ、ゴーレムだった。

「しかも、フェザーゴーレムかよ、めんどくさいな」
「さっさと終わらしましょう」
二人は剣を抜く、ギンリュウは鋼をさらに高密度に圧縮した強度と堅さを持つ重鋼を使った大剣、“アースバーン”、リエのは純白の鋼、白鋼を使ったレイピア、“エクソシスター”。二人が持っている武器は二つもない特注品だった。
「んじゃ、行きましょう！ギンリュウ！」
「了解！我と彼の者の力を上げよ！パワー・ゲインズ！」
ギンリュウはまず自分とリエの力を上げた、するとリエは持ち前の素早さで一気にフェザーゴーレムとの間合いを詰めていく。
「そこ！」
リエは鋭い突きを何度もフェザーゴーレムに当てる、するとゴーレムは少し怯んだ。
「でやぁぁぁ！」
ギンリュウは下から上へ斜めに切った。しかし寸前でフェザーゴーレムは少し後ろに下がったため、浅く、さら傷までもが回復し始めた。
「勘弁してくれよ……」
「ゴーレムはかなり高度な自然回復を持っているから一撃で決めないと……」
「悪いけど、重力系は使えないぜ……」
「わかっているわ」
ギンリュウが重力系の魔法を使えないのは邪神状態になる恐れがあると思っているため、理由はギンリュウの赤い目であった。
「ヴァオォォォォオオオ！」
ゴーレムは二人に向かって拳を振り上げた。
「「話し合いしているのに邪魔をするな！このバカゴーレム！」」
二人はタイミング良く、ゴーレムに斬りかかる、リエは頭を突き抜け、剣を走らせ、ギンリュウは思いっきり振りかぶって斬りつける。

「ゴォォォオオオオ！？」
致命傷を負ったゴーレムは高度な自然回復が追いつけず、そのまま崩れ去ってしまった。
「……案外、楽に倒せたな」
「同感ね……」
二人は剣をしまい、先へと進んだ。

第十二話　古の魔法の神殿（後書き）

なんかディルとメアルのフラグが立ちまくっているような……。（笑）
では次回もよろしくお願いします！

第十三話　ディルの才能

ドゥアーク神殿　中層　アスカ・バスカル・ディーン

アスカ達も何とか上に上がる事ができ、そのままギンリュウ達を探していた。

「うーん、この神殿は本当に複雑なのだな」

「デスネ、単純カト思ッタヨ」

「いや、単純で済まさないと思うけど……」

三人は気配を探っていた、しかし、密度の濃い魔力のせいで気配を探れなかった。

「しかし、なんて魔力なの……、気が狂いそうだわ」

「デモ、私ハオカシイト思ッテイル事ガアルノデス」

「何ですか、バスカル殿？」

「神殿ノ入リ口ニハ魔力ノ流失ヲ防グタメノ結界ガ張ッテアル」

「でも、入り口まで魔力を感じたわよ」

バスカルは苦い顔をした。

「多分デスガ、誰カガ、コノ神殿ノ結界ヲ破壊シタト思イマス」

「結界を破壊したぁ！？」

「私トギンリュウハ最初、アナタ達ガ来タカラダト思イマシタ」

「ま、待ちなさいよ、私達はそんな能力は持ってないわよ」

ディーンは慌てながらも必死に否定した。

「モチロン、ソンナ事ハワカッテイマス、モシ、ソウナラバギンリュウガ来タ時ニ破壊サレテイタ」

「そうか、ギンリュウ殿は前に何度か来た事があると言っていた、しかも彼は聖鬼神」

バスカルは頷いた、その時、アスカ達は魔物の気配を感じた。

「魔物！？」

角から現れたのは破壊獅子（ブレイク・レオン）だった。

「破壊獅子（ブレイク・レオン）……、やっかいだな」

「だけど、相手にとって不足はないわ！」
「行キマショウ！」
戦闘態勢に入ろうとしたとき、見覚えのある声がアスカ達を説得した。
「ま、待ってください！」
「「！？」」
「僕たちですよ！」
そう言って出てきたのはディル、その後からギンリュウ達が現れた。
「アスカ！」
「バスカルさん！」
「ディーン……」
「隊長！？ギンリュウ殿！？」
「メアルまで……、それにその破壊獅子（ブレイク・レオン）は……」
「話すと長くなるんだな……これが」
ギンリュウはここまでの経緯を話し始めた。

ドゥアーク神殿　中層　ギンリュウ・リエ
時は少し戻り、ギンリュウとリエは相変わらず二人で出口を目指していた。
「あぁん、もう、まだ見つからないの！？」
「苛つかないでくださいよ、ここはものすごく広いんですから」
「だからって……」
そんなやりとりしていたギンリュウ達は、それでも歩いていた。
「でも、この魔力は尋常じゃないわね」
「尋常じゃないだけなら、たいした事ないよ」
ギンリュウは真面目な顔をして言った。
「どういう事よ？」
「魔物が異常に少ない、聞いた話だけど、下層に行けば行くほど魔物は強くなり、数も多い」

「でも、私達が会ったのは真実の獅子（トゥルー・レオン）とフェザー・ゴーレムしか……」
「だから、異常なんだよ」
するとギンリュウは魔物の気配を感じた。
「隊長、どうやら三匹目らしいぜ」
「まったく、本当に遠慮しなさいよ」
ギンリュウ達は武器に手をかけた、しかし、現れたのは予想外の事だった。
「あ、隊長、ギンリュウさん」
「ディ、ディル！？」
「なんであなたが……」
さすがに二人は驚いた、魔物の気配がある方からディルが現れたのだから……。
「あのさ、魔物がいなかったか、そこの角から……」
「魔物？あぁ……」
ディルが手をポンッとさせた時、ギンリュウが指を指した方から破壊獅子（ブレイク・レオン）が現れた。
「わあぁぁぁぁぁぁ！？」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！？」
ギンリュウとリエは驚いた、しかし、よく見ると、その上にメアルが乗っていた事に気が付いた。
「あ、お前は戦乙女の傍ら」
「ど、どういう事よ、これ……」
「あ、この子は僕が手なずけたので、安心していいですよ？」
「手なずけたって、あなた……」
リエは驚きを通り越して、逆に呆れてしまった。
「ディル、お前、まさか魔教師（モンスター・チョイサー）か！」
「はい、そうですけど」
「魔教師（モンスター・チョイサー）？」
「正式には魔物調教師、魔物を唯一、手なずける事が出来る職業だ

よ、今は廃れてかけているって聞いた事がある」
「僕の村では魔物が隣にいる事なんて、当たり前でしたから」
ギンリュウとリエとメアルは驚愕な顔をした。当たり前だ、魔教師（モンスター・チョイサー）なんて彼らの近くにいなかったのだから。
「こ、今回の新人はとんでもない奴ばっかりね、聖鬼神の双子に威厳のある侍、それに魔物を懐かせる魔教師（モンスター・チョイサー）なんてね」
「あはは」
ディルは思わず照れてしまった。
「とりあえず、アスカさん達を探そう」
ギンリュウがそう言うと三人は頷いて、再び歩き始めた。

ドゥアーク神殿　中層
「なるほどね、納得がいくわ」
「しかし、ディネカル殿が魔教師（モンスター・チョイサー）だったとは」
「驚キデスネ」
魔教師（モンスター・チョイサー）はモンスターの気持ちをわからなければならず、モンスターを扱うには数年の訓練が必要となり、今では廃れてしまったと誰もが思ってたぐらい少ない。
「でも、なんでメアルが破壊獅子（ブレイク・レオン）に乗っているの？」
「実は足を痛めてしまい、それで途中までは、その……、えっと……」
メアルは顔を徐々に赤くなっていく、メアル以外は全員でディルを見た。
「あ、途中までは僕が背負ってましたー」
「「「「「ディルー！！！」」」」」
「え、急になんですか、みなさん！？」
「お前、何、敵であるあいつを背負ってたわけ？」
「はい」
ディルは十六歳とは思えない無邪気な笑顔をした。
「駄目だ、隊長、あいつフラグを立て始めるぞ」

「いやいや、すでに立ってたわよ」
「メアルも絶対にまんざらではないわ」
ギンリュウ達はディルとメアルに聞こえないように小声で話した。
「？」
「……」
ついでにメアルはまんざらではなかった。

ドゥアーク神殿　中層　？？？
ここは神殿の中心部、そこには誰もいないはずなのにそこに一人の少女がいた。
「うふふ、これで、私はもっとお姉さまに近づけるわ……」
赤髪にポニーテール、幼い顔つき、服装はまるでお姫様が着るようなドレスだった。
「さぁて、後は彼女達が来るまで待つとしよーと」
少女は可愛らしい笑顔をする。しかし、その笑顔はどこか不気味さをもかんじるのだった。

ドゥアーク神殿　中層　通路
ギンリュウ達はまるで導かれていくように歩いていた。理由は一つ、ギンリュウとメアルとディーンが何かを感じ取り、そのままその方向に向かっていった。
「ねぇ、三人とも、どうしたのよ？」
「変ですよ」
「ごめん、でもなんか向こうに行かなければならいような気がして……」
「この気配、どこかで感じた事がある……」
「偶然ね、私もよ」
ディーンとメアルは少しばかり真面目な顔をした。
「ここ……だね」
ギンリュウ達が着いたのはあまりに大きな扉だった。

「コレハ中心部ヘノ扉デスネ」
「中心部まで来ちゃったのね、私たち……」
「でも、ここなら脱出できる手がかりがつかめるかもしれません」
「そうだけど……」
リエはあまり乗り気ではなかった、何か嫌な予感がしたからだ。
「開けるよ」
ギンリュウは扉を手で押すと、いとも簡単に開いてしまった。
「……入ってみる」
ギンリュウを先頭にメアル、ディル、ディーン、バスカル、アスカ、リエの順番で入った。
「ここは……」
「広いわね……」
そこはただ広い部屋だった、しかし、蝋燭立てが四本があり、部屋の真ん中には魔法陣があった。ここが儀式に使われた部屋に間違いはないだろうと誰もが思った。
「一体、何のために……」
「ここはね、古の魔法を封印するために部屋なのよ……」
「「「！！」」」
全員が驚いた、そこにいたのは一人の少女だった。
「……！」
「お前は……！」
現れた少女はスカートの裾を掴み、軽く会釈、そして可愛らしくも不気味な笑みを浮かべた。
「お久しぶりね、ディーン、メアル。そして初めまして、聖鬼神、ギンリュウ・スペイエル……」
「お前は……？」
「私はマリン、あなたと同じ重力系（グラビティ）の戦乙女よ……」
ギンリュウはマリンという戦乙女に不気味に思えた……。

第十三話　ディルの才能（後書き）

すいません、ドゥアーク神殿での任務の話はまだ続きます。

第十四話　三人目の戦乙女（前書き）

早くも三人目、登場です。
今回は少し長いです。

第十四話　三人目の戦乙女

マリンはゆっくりとギンリュウ達に近づく、不気味な笑みを浮かべながら。
「待ってたわ、三日ぐらいかしら、もう暇で暇でしょうがなかったわよ」
「マリンっと言ったな、何が目的だ、それに待ってたって……」
「モチロン、封印を解くためよ、愛するお姉さまのためにもね……」
マリンは恋する乙女のような、うっとりとした顔をした。
「あなた、古の魔法がどんなに危険か、わかっているの？」
リエはマリンに問いかけた、リエはギンリュウが心配だった。嫌いではあった、彼はむかつく存在と今でも思っている。
しかし彼女はギンリュウが暴走する所を見た、下手をしたらギンリュウの命が失われた可能性だってある、使用者の命まで蝕むかもしれない、だからだった。
「わかっているわよ、でもね、お姉さまのためならば、私はどんな危険だってするわ」
「つまりだ、力ずくで止めるしか方法しかないって事か」
ギンリュウは“アースバーン”を鞘から抜き、構えた。ディーンとメアルとは違う、あの二人には敵意はあまり感じなかったが、マリンは完全な敵意がある。
「悪いけど、もう準備は整ったの、もう邪魔はできないわ」
「何を言って……」
マリンはさらに不気味な笑みを浮かべる。
するとマリンの足下にあった魔法陣が光りだす。
「な、なんなの、これ」
「……！ぐぅ！？」
ギンリュウがいきなり苦しみだす、いや、ギンリュウだけではなかった、ディーンもメアル、事もあろうか魔法陣を発動し始めた張

本人であるマリンまでもが苦しみ始めた。
「あぐ……」
「メアル！ギンリュウさん！」
「マリン……、お前、何を……」
「あは、あはは、これはきついわ、でもお姉さまのためなら……、邪神状態、いいえ、真の聖鬼神の力が手に入れるために！」
「「「……！！」」」
「真の力、だと」
「あなた達は……邪神……状態は暴走した時だと……思ってたでしょ？」
マリンは苦しみながらも、しゃべり始めた。
「……？どういう事だ……」「なん……だと……」
「あなた……達……は……アァァァァ！！」
マリンは叫び始めた、黒い気がマリンを覆い始める。
「ギンリュウ！しっかりしなさい！」
「無茶……言うよ……」
リエはギンリュウの側で喝を飛ばし、何とか意識を保とうとした。
「はぁ……はぁ……」
「メアル、しっかり、僕が側にいてあげるから！」
「ディネ……カル」
ディルはメアルが力に飲み込まれないように言葉をかける、しかし、メアルは黒い気に覆われ始めた。
「ダメ！メアル、意識をしっかり持って！」
「ウゥゥ……」
「このままでは、三人とも、危ないぞ！」
「トニカク、魔法陣ヲ破壊シマショウ！」
アスカとバスカルは魔法陣を破壊するために武器を魔法陣の線に突き立てようとした。
魔法陣は強力な魔法を出すために必要な物だ、しかし、線一本でも途切れると破壊され消えてしまう。

「サセナイ！！グラビティ・フィールド！！」
「ヌオ！？」
「くっ！」
マリンは巨大な結界を張り、結界に立ち入れなくさせた。
「アハハハハ、誰モソンナ事ハサセナイ、オ姉サマノタメニモ！！！！」
完全にマリンは邪神状態になり、黒い翼、赤い目、黒い髪、その姿はあの時のギンリュウと一緒の姿がそこにあった。
「サァ、アナタ達モ、力ヲ解放シナサイ！！！」
「「そんなの……」」
そう言ったのはギンリュウとディーンだった。
「「お断りだ（よ）！！！」」
ギンリュウとディーンは苦しみながらも、詠唱を始めた。古の魔法、上級クラスを放つためだ。
「やめなさい、ギンリュウ！」
「ディーン……」
ギンリュウとディーンは抵抗しているのかかなり邪神状態になるが遅かった、だからこそできるのであろう。
「我の名において命ずる、重力よ」
「その爆発は全てを破壊のため」
「我の手に集まり、そして解き放ちたまえ！！」
「我の敵を消滅させろ！！」
すると二人の手には魔法陣が展開された、そして……。
「グラビティ・ブレイク！！！！！」
「ギガント・バースト！！！！！」
ギンリュウの魔法で重力の結界にヒビが入る、そこにディーンが放った魔法はヒビの入った結界を破壊する。
「「ぶち壊せーーーー！！」」
「ナンダト……、聖鬼神ナラトモカク、ディーン、何故？」
「私の……親友を……苦しめて……黙って……いられないわよ……」

「“バジリスク”の思い通りにはさせない……ぜ」
結界は破れ、二人の上級魔法は魔法陣と結界を破壊尽くす、マリンをも巻き込んで……。
「「ウオォォォォオオオ！！！！！」」
「グワァァァァアアアア！！！？？」
魔法陣は破壊され、ギンリュウ達から黒い気は消える、目も元に戻り、ギンリュウはフッと息を吹いた。「ギンリュウ！大丈夫！？」
「おや、珍しい、隊長が俺の事を心配してたよ」
「べ、別に心配なんか……」
「メアル、大丈夫？」
「はい……」
「良かったー」
ギンリュウは中央に目をやる、そこにあるのは大穴、そしてマリンはとっさの事で避けたのだろう、大穴の横にいた。
「しぶといぜ……」
ギンリュウとディーン、メアルは邪神状態ではなっていないため、枯渇病にはならなかったが、マリンは枯渇病になっていた。
「くそ……、こんな……」
ギンリュウは立ち上がり、リエと共にマリンを拘束しにマリンの元に行った。
「さぁ、勘弁しなさい、もう抵抗はできないでしょ？」
「……」
「お前にはたっぷりと聞きたい事があるんだよ」
「……ふ」
マリンは不敵な笑みを浮かべた。
「おい、何、笑って……？」
その時、目の前に女性が現れた、白衣をまとい、美女って言っても過言ではない顔立ち、黒く長い髪。
「「……！！」」
「お……姉……さま」

「大丈夫かしら、マリン？」
「申し訳ございません、任務は失敗して……」
「何も言わなくっていいのよ、さぁ、帰りましょう」
女性はマリンを抱きかかえ、その場を去ろうとした。
「待て！」
ギンリュウは当然の事ながらも呼び止めた、女性の首筋に剣を突きつけながら。
「お前、何者だ！」
女性は振り返り、こう答えた。
「私は“バジリスク”総機関長、ハーディア・マスルク」
「……！！」
ギンリュウはふっと、昔の事を思い出す。
ガゾーマは古の魔法を知るためならば、犯罪だってやる、しかし、人間らしさは失わなかった。
そのガゾーマからたった一人、絶対に近づくなと言われた研究員がいた、それが今、目の前にいるのだった。
「お前がハーディア、あのガゾーマさえ嫌われている元“レックス”の研究員……」
「何ですって……」
「……」
ハーディアはギンリュウと面を向かい合った。
「思い出したわ、あなた、零弐号じゃない」
「零弐号……？」
リエは頭を傾げた、一体、誰の事を示しているのかわからない、するとギンリュウが口を開いた。
「懐かしい、呼び方をしてくれて、どうも……」
「ギンリュウさん、どういう事？」
ディルはメアルを支えながらギンリュウに聞いた。
「零弐号……、俺が“レックス”にいた時の名前だよ、正確にはもう一つの名だがな」

「化け物である、あなたに二つの名前なんて不必要でしょ？零弐号」
「そんな物でギンリュウを呼ばないで！！」
リエもハーディアに剣を突きつける。
「ギンリュウは人間！化け物なんかじゃない！」
「隊長……」
ギンリュウはリエに心から感謝していた、いくらお互い嫌いでも、リエはギンリュウの事を化け物だと一度も思わなかった。
「まぁいいわ、メアル、ディーン、あなた達も帰りなさい、エーマが連絡もないって心配してたから」
「……」
「……了解」
「それじゃ、ついでにあなた達を入り口の近くまで送りましょう」
ハーディアはテレポの宝石を取り出し、魔法名を唱えた。
「ま、待ちやがれ！」
「テレポ・レインズ！」
ギンリュウ達は光に包まれ、その場から離れた。

第十四話　三人目の戦乙女（後書き）

次回でドゥアーク神殿編は終了です、長かった……。

第十五話　ギンリュウとガゾーマ、二人の関係（前書き）

今回のサブタイトル、若干長いよーな気がします。

第十五話　ギンリュウとガゾーマ、二人の関係

ギンリュウ達が気が付いた時にはバスカルの村にいた。
どうやら、ハーディアの“テレポ・レインズ”は彼女のオリジナルの魔法で、それぞれ個別に別の場所を送る事ができるらしい、もちろん、ギンリュウ達は神殿の入り口にテレポされた。
それから二日後……。
第十二部隊宿舎　食堂
「しかし、ディルはどこに行ったんだ？」
村から戻ったギンリュウ達、しかし、そこにディルの姿はなかった。
「捜索はしているけど、今のところ、ディルの情報はないわね」
何故、ディルがいないのか、理由はわからなかった。
ギンリュウ達が気が付いた時にはすでにディルはいなかった。
「あのさ、可能性の一つとして、だけど……」
「なに？」
現在、宿舎にはギンリュウとリエ、アスカしかいない、他はディルを探すために動いていた。
「もしかしたらさ、ディル、あの戦乙女、メアルって言ってたっけ？あいつと一緒だったりして……」
「まさか……」
リエは苦笑した、いくら何でもそれはないだろうと思ったが……。
「でも、ありえなくないのはどうしてなの？」
「……ディルは天然だから」
「……」
二人は黙ってしまった、ディルならあり得なくなかった。
レックス本部　ガゾーマの研究室
「戦乙女が現れた、だと？」

ガゾーマは研究室で報告書を読みながら、聞き返した。
「はい、どうやらドゥアーク神殿に……」
「厄介な……」
ガゾーマは額を抑えた。
「しかし」
「？」
「零弐号、いや、今ではギンリュウでしたね、彼とエーマさんの所の戦乙女が止めたと……」
「そうか……、すまん、ありがとう、下がってくれ……」
「では……」
ガゾーマはもう一度、報告書を読み返した、送り主は“バジリクス”に潜り込ませているスパイからだった、そこには一人の少年を保護されたと言う近状報告があった。
「この名前は……？」
ガゾーマは聞き覚えのある名前があった、それはいつだったか、知り合いの魔教師（モンスター・チョイサー）が連れてきた少年。
「名前はなんだったか……、そう、ディネカル……」
偶然だろうか、しかし、確かめてみたくなった。
「さて、出かけるとするか……」
ガゾーマはサングラスに黒いコートを着て、“ゼロローム”である人物にメールを送った。
「この行動が吉と出るか、凶と出るか……」
そして、ガゾーマは研究室を出た。

ディルがいなくなってから三日後　首都ベーゼル　喫茶店「ティロン」
ギンリュウはコーヒーがおいしいと有名な喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら人を待った、隊長に用があると言って出てきたのだ。
「やぁ、零弐号……」
ギンリュウの元にサングラスを付けた男がやって来た。

「よう、零号」
「ずいぶん、懐かしい呼び方をしてくれるね……」
「てめぇもな」
サングラスをサングラス男の正体はガゾーマだった。
「さて、本題に入ろう」
ガゾーマは座り、ギンリュウに報告書を渡した。
「これは？」
「まぁ、じっくり見たまえ、アイスコーヒーを一つ」
ギンリュウはガゾーマから渡された報告書を見る内に驚愕な顔となった。
「マジかよ……」
「どうやら、当たりだったようだね」
ガゾーマはふっと笑った。
「それで、このエーマって言う研究者、どこかで……」
「君とミリア君の遊び相手になっていた研究者だよ、覚えていないかね」
「あぁ、エーマの姉さんか……、あの人は人間としても優しかったのに、なんで“バジリクス”に？」
ガゾーマは苦い顔をした。
「エーマは、君たちがドゥアーク神殿で出会ったハーディアの妹なんだ……」
「……そうか」
ギンリュウはそう言うと、後ろを振り向いた。
「隊長、いつまで隠れてるつもりですか？」
「うぐっ……」
「ふっ……、私は何もしないよ」
すると、陰からリエが出てきた。
「いつから気が付いたの？」
「最初は気が付かなかったがな、ここに来て気配を感じたから」
「……」

リエは不機嫌な顔をして、ギンリュウの隣に座った。
「だって、急に用があるって出かけるもん、暇だったし」
リエはだっだしの所をかなり強要して言った。
「で、一つ聞きたい事があるんだけど」
「何かね？」
「あなた達、敵じゃないの？」
もっともな質問だと思う、この二人は敵同士だと思われてもしょうがいないと思った。
「んー、ちょっと違うな、彼に条件付きで任務を任せたんだよ」
「任務？」
「ハーディアと言う奴を抹殺、それが俺に任せられた任務だ」
ギンリュウは少し暗い顔をして、言った。
「ハーディアって、ドゥアーク神殿で会った女性の事？」
ギンリュウは頷いた。
「三年前、ハーディアはその時までの聖鬼神の資料を盗み、我々を欺いて“レックス”を抜け出した」
「何故？」
「私が研究者となり、ギンリュウ君達を保護したからさ」
「どういう事？」
「実はガゾーマは元々は研究者じゃなかったんだ」
「え？」
リエは驚く、ガゾーマが最初から研究者でない事に……。
「私も聖鬼神、世界で初めて発見された聖鬼神なのさ」
「……！」
リエは思わず、立ち上がった。
「系統は隕石系（メテオ）、実験番号は零、ギンリュウ君とは血の繋がっていない兄弟と言ってもいいな」
「お前に兄弟って言われたかねーよ」
「ちょっと、待ってよ、あなたが聖鬼神なら、なんで研究者なんかに！？」

「私は別にどうでも良かった、しかし、ギンリュウ君達が来てから考えが変わったんだよ」
「……」
リエは再び座った。
「で、ギンリュウが出した条件って？」
「俺とミリア以外の姉弟はまだ“レックス”にいる、だから研究所から連れ出して一緒に住ませる、それが条件さ」
ギンリュウがそう言うと、残りのアイスコーヒーを飲み干した。
「……でさ、ディネカルの事なんだけど」
リエはこれ以上深く突っ込むのを辞めて話題を変えた。
「ディルはエーマ・ガマルと言う研究員の所にいる」
「エーマ？」
「エーマは元“レックス”の研究員でね、研究者としても人間としても信頼できる、安心していいよ」
「そう……」
リエは安心したのか、椅子に寄りかかった。
「で、そのエーマって奴はどこにいるのよ」
「それが……」
「そこが問題なんだよ」
ギンリュウとガゾーマはため息をついた。
「えっと、どういう事？」
「「エーマ（の姉さん）は放浪癖があるんだよ」」
「つまり……」
「「どこにいるか、まったく不明」」
「うわ～」
三人はそのまま黙ってしまった。
???
暗い暗い部屋に唯一の光は医療用のカプセルだけだった。
「マリンの様子はどう？」

「いったて正常です、もう少しで完治します」
「そう……」
白衣をまとい、どこか冷たい感じがする顔立ち、暗い藍色をした長髪、それがハーディアだった。
「エーマは？」
「連絡はありません……」
「あのバカ妹が……」
ハーディアはコーヒーを飲みながら、近くにあった椅子に座った。
「零弐号、それと零号、あの二人が最大の障害ね……」
「戦乙女、マリン様、完治いたしました」
「……わかったわ、回復液を無くして、カプセルを開きなさい」
「わかりました」
研究員が機械を操作するとカプセル内に満たされていた回復液は無くなり、カプセルの半分が倒れるように開く。
「う……あ……」
「すぐに……」
「はい」
何人かの研究員はマリンを支える。
「マリン……」
「……お姉さま？」
「大丈夫？」
ハーディアはマリンに優しく微笑む。
「申し訳ございません、まさか、ディーンに邪魔をされるとは……」
マリンは嫉妬深い顔をした。
「しょうがないわ、ディーンは親友を大切にする愚弄だもの」
ハーディアはその優しい微笑みに加え冷たい笑顔になった。
「今日はゆっくりと休みなさい、マリン」
「……」
マリンは黙ったまま部屋を出た、ハーディアはそのまま残りデータを見た。

「零弐号……！私はあなたを許さない、絶対に絶対に潰してやる」
ハーディアはギンリュウの顔写真にナイフを突き立てた。
「見てなさい、絶対に最強の力を手に入れてやる！」
その時のハーディアの顔は、人間の怒りではなく、あまりに恐怖を感じる微笑みだった。

第十五話　ギンリュウとガゾーマ、二人の関係（後書き）

次で第二章は終わります。

第十六話　三つの旅立ち（前書き）

今回は章のエピローグみたいなものなので、短いです。

第十六話　三つの旅立ち

ギンリュウとリエはディルを探しに旅を出る事を決意した、もちろん二人だけではない、バーシュ、ルエ、ミリアの三人も連れて行く事にした。

あの後、ガゾーマはエーマを探すなら旅をした方がいいと言うを言い残し帰った、その後すぐにギンリュウとリエはディルの長期捜索として任務を発令し、旅に出る事になった。

「ディル、絶対に探し出してやる！」

「まったく、張り切るのはいいけど、迷惑かけないでね」

宿舎の門の前でアスカ達が見送りに来た。

「隊長、部隊の事はお任せしてください」

「えぇ、よろしく頼むわね」

「ギンリュウ……」

「なんだ、リリ」

「帰ったら、ハンバーグ、作ってあげる」

「あぁ。楽しみしているよ」

リリはギンリュウからいくつか料理を習っていた、その中でもハンバーグが得意だった。

「じゃ、行って来るね！」

「必ず、ディルを連れて帰る」

「ほんじゃ、行きます」

ルエがそう言うとバーシュの車に乗り始めた。

「隊長……」

「何よ」

「必ず、ディルを連れて帰ろうぜ」

「当然よ！隊員を責任持って、連れて帰るのが隊長としての役目よ」

リエは自信満々に言うと、車に乗った。

「そんじゃ、行って来るか！」

ギンリュウも車の荷台に乗り、バーシュは車のエンジンをかけた。
「絶対に帰ってこいよ！！」
「いってらしゃーい」
「頑張ってくださいい！」
「さぁ、出発するぞ！」
バーシュがそう言うと、アクセルを踏む、そして彼らは仲間を連れて帰るための旅が始まった。

“レックス”研究所
「ガゾーマ様、本当に行かれるのですか？」
「あぁ、エーマを説得してくる」
ガゾーマも旅を出るための準備をしていた。
「……」
ナミアはガゾーマの身を案じて不安になった。
「ナミア」
「はい」
「君に任務を与える」
ナミアは一瞬でも期待をしていたが、期待とは別の事を言われたので少し落ち込んだ。
「私と一緒に、エーマを探してほしい」
「えっ！？」
ガゾーマが帽子を被った時にそう言った、ナミアは驚きを隠せなかった。
「今回は私一人では無理だ、研究所はショウ君に任せる事にしている、彼なら安心できるから」
「……」
「どうだ、一緒に来てくれるか？」
ナミアの答えは一つだけだった。
「はい、私はあなた様にどこまででも付いていきます」
「ふ、よろしく頼むよ」

こうして、ガゾーマはナミアを連れて、エーマを探しに行く事にした。

ナチュリコムの隣国　ティルード　ギンハクの森

ここ、鉱石の国ティルードにはめずらしい森があった、ギンハクの森、草木全てが銀色に輝く森であった。

「よーし、今日はここで野宿しよっか」

ここに旅人達がいた、赤いツインテールに背の低く、童顔の一女性（・・）、彼女こそが、ハーディアの実妹、エーマであった。

「またかよ、まだ、１０？も満たしてないぞ」

ディーンが愚痴るが、エーマは座り込んだ。

「私はさ、君らみたいに体力とかないからさぁ、一日に９，９９？までしか歩けないもん」

「「あと０，０１？ぐらい頑張ってよ！？」」

ディーンと一緒にツッコミをしたのは、フードを被った少年だった。

「それでも、私たちより年上の行為ですか……」

メアルも呆れていた。

「いいじゃん、それに今日はもう進もうと思っても暗いから進めないよ？」

「「誰のせいですか！？」」

「君たち、息ぴったりだね～」

しかし、エーマの言う事はもっともだった、ここギンハクの森は魔物が多い、エーマ達がいる付近は安全だが、これ以上進むのは危険だった。

「あ～、もう、早く森を抜けて街に行きたいよ」

「そうですね……、ってメアル、抱き付かないで！」

メアルはフードの少年に抱き付いた、するとフードがとれ、素顔が明かされた。

ディネカル・アークソン、通称「ディル」、メアルのそばにいた

ら、何故か一緒にエーマの所まで飛ばされた。
「いや～、正直びっくりしたよ、君たちが帰るまで待ってんだけどさ、まさか姉さんのテレポで帰ってくるなんて、思わなかったよ、しかもディネカル君も付いて」
「僕の事はディルでいいです、まさかギンリュウさんと離れる事になるんて……」
ディルはため息をついた。
「ディル、大丈夫、私が付いているから、ずっと……」
「最後の所、いらないよね！」
この三日間、この調子でメアルはディルに言い寄せていた、なんやかんやでディルに好意を持ってしまったようだ。
「じゃ、おやすみなさーい……」
「早いな寝るの」
「今日は僕が見張りをしてるんで、寝てもいいすよ」
「そうか、悪いな、じゃあ、おやすみ……」
「ディル、私を……」
「君の言いたい事はこの三日間でよーくわかったから黙ってようね？」
「う～、おやすみなさい」
メアルは不機嫌ながらも、ディルに抱き付いたまま寝てしまった。
「ギンリュウさん、隊長……」
ディルは夜空を見上げた。

ギンリュウ達はディルを探しに、ガゾーマ達はエーマを説得に、そしてディル達は気ままな旅に、三つの旅立ちで、何があるのか、それは誰も知らない。

第十六話　三つの旅立ち（後書き）

第二章はこれにて終了します。
次は登場人物や世界設定を書きたいと思います。

登場人物紹介？（前書き）

今回は前回、紹介したキャラクターを改めて紹介と追加設定、＋αです。
すいません、一部、設定追加です。たいしたことではないと思いますが……。

登場人物紹介？

ギンリュウ・スペイエル
性別・男
年齢・１９歳
身長・１７８？
体重・６８？
武器・大剣「アースバーン」
魔力・重力、強化
所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊

本作の主人公、銀髪のストレートに灰色の目をしており、クールな顔立ちである。ケンカ早いが、冷静沈着で意志が強い。ガゾーマからの任務により、ミリアと共に“レックス”を脱走と見せかけた、その後、目的のため“ガーディアン”に入る。自然観察が好きで自然の知識は豊富、料理の腕もかなりの者である。

現在はディルを探しに旅に出ている。

ギンリュウについて

作者が一番気に入っているキャラクターです、「聖鬼神」の原作当初はリエだけではなくみんなから嫌われ者の設定で名前も漢字で性が違っていました、当初はミリアはいなく、四人姉弟の長男という設定でもありました。年齢も青年ではなく少年であった事も。さらにこの小説のタイトルである「聖鬼神」は彼個人の二つ名でもありました。

リエ・マレンデカル
性別・女
年齢・２１歳
身長・１６８？
体重・４７？

武器・剣「エクソシスター」
魔力・回復、火炎、氷結など
所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊　隊長
　本作のヒロイン、黒髪のサイドポニーに茶色の目できつめの顔立ちをしている。素直ではなく男嫌いだが仲間思いで根はとても優しい。第十二部隊の隊長として責任感があり、かつて何でも一人で解決しようとするが、ある事件を経て、仲間を頼る事を覚える。ギンリュウほどではないが料理は得意な方で特に洋風が得意である。
　現在はディルを探しにギンリュウと共に旅に出ている。

リエについて
　リエも作者が気に入っているキャラクターです。原作当初は部隊は女性のみで金髪のツインテールで、名前も漢字、性も違っていました。年齢も最初はギンリュウと同じ歳だったはずでしたが、いつの間にか年上になっていました。ツンデレなのは相変わらず、ギンリュウとの会話は作者もおもしろがって書いています。

ミリア・スペイエル
性別・女
年齢・１９歳
身長・１５８？
体重・４５？
武器・杖「水晶の杖」
魔力・聖力、回復、火炎など、かなり多彩
所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊
　ギンリュウの妹、ギンリュウと同じ銀髪で黒いリボンでまとめている、顔つきはおっとりしている。かなり天然だが、心優しく、みんなに親しまれる。育成学校では首席をとり、卒業している。ギンリュウと共に“レックス”を脱走したが、それはギンリュウの任務を手助けしたからであった、魔法に関しては部隊の中では群を抜いている。

現在はディルを探すために旅に出ている。

ミリアについて

原作当初はいませんでしたが、突然現れたのがミリアでした。設定は今とあまり変わらないようですが、なんと出てきた当時は百合キャラだったのが、作者も驚いています。あと、最初はリエと険悪な関係だった（ギンリュウよりも）のも現在と違う設定となっていました。またミリアは首席ではなく、魔法で一番になって卒業という点もありました。

ディネカル・アークソン

性別・男

年齢・１７歳

身長・１５４？

体重・４７？

武器・格闘装備「マーズウルフ」

魔力・強化、弱体

所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊

愛称は「ディル」、世界で数少ない魔教師（モンスター・チョイサー）。薄い黄色でセミロングのツンツンヘヤー、年齢の割には幼い顔をしている。少し臆病ではあるが仲間思いであり、怒るとどんなヤクザよりもめちゃくちゃ怖い、身長が低い事を気にしている。格闘センスは部隊の中で群を抜いており、ギンリュウですら敵わない程である。実は結構天然な所があり、そのせいでメアルに好意を持たれている。どんなモンスターでも好かれる体質でもある。

現在はメアル達と共に気ままな旅をしている。

ディネカルについて

原作当初はいませんでした、ギンリュウの親友として出させてたので、そんな重要なキャラではなかったのですか、まさか、ここまで重要キャラになってしまうとは……。またモンスターを操る魔教師（モンスター・チョイサー）も後付け設定です。次章では彼の物語も書くつもりですので、前

の二章と比べ長くなるかもしれません。

ガゾーマ・バラディルカル
性別・男
年齢・２８歳
身長・１８５？
体重・６３？
武器・不明
魔力・隕石、それ以外もあるが不明
所属・レックス本部　総機関長
　研究者。白髪混じりの黒で前髪を上げており、後ろで結んでいる。目の色は水色、冷徹さを感じさせる顔つきで全体的にやせ気味である。ひょうひょうとしていて掴みどころのなく、冷徹で残酷と言われているが実は優しく、ギンリュウの兄貴分（ギンリュウは否定している）になってた頃もあった。実は聖鬼神であり、ギンリュウ達と同じ実験体になっていたが、その後、研究者となり、無理な実験をやめるように抗議し、その後は機関長となった。
　現在はナミアと共にエーマを探している。

ガゾーマについて
　はっきりと言うと、最初はガゾーマは完全な悪役でした。ちなみに原作当初はおらず、ギンリュウの姉（現在のナミアとは別の人）が“レックス”のボスでしたが、ガゾーマが“レックス”の機関長となって、味方か敵かと言う中間的な存在になってしまいました。あと、最初は聖鬼神にする気なんてまったくなかったです、しかし、主人公との関わりを持たせるために聖鬼神になりました（不遇……）。現在はギンリュウ達と同じ敵を持ち、協力する（かな？）関係になりました。

エーマ・マルクス
性別・女

年齢・２０代前半である事は確か
身長・１４６？
体重・３６？
武器・拳銃“ガン・ガン”
魔力・不明
所属・“バジリクス”第二研究所　所長
　ディーンの実妹。赤髪のツインテール。目の色は朱色、幼い顔つきで、子供ぽい体型だが、立派な大人である。幼い言動が目立つが、時折、冷静な態度を見せ、結構世話好きで心優しい所ある。メアルとディーンが所属する研究所の所長、元“レックス”の研究員でガゾーマとは仲が良かった。メアルとディーンを兵器としてではなく、人間として見ている。銃の腕前はかなりの者で、愛銃を常に持ち歩いているが体力はない。放浪癖。
　現在は気ままな旅をしている。
エーマについて
　話の途中で思いついたキャラです。しかも元気娘（？）で敵の親玉の妹って……、出てくるとは思いませんでしたよ。第三章ではディルを振り回しそうだなっと思いつつも、一応重要キャラではありますが、重要度ではギンリュウやディルより下で特に活躍をさせようかなと思ってません、でもこういうキャラ限ってものすごく活躍しそうで怖いです（なら出すなよ）。

登場人物紹介？（後書き）

次回も登場人物紹介です。

登場人物紹介？（前書き）

今回も登場人物紹介です。

登場人物紹介？

バーシュ・ガランフィル
性別・男
年齢・２４歳
身長・１８４？
体重・８２？
武器・刀「ハクギントウ」
魔力・不明（使わないため）
所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊
　刀使い（侍とも言う）。髪は黒く、サムライヘヤー、前髪はおろしている。目つきは細く、結構渋い顔つきになっている。冷静沈着で現実主義だが、礼儀正しく仁義を忘れない、正義感は決して高くはないが自分の選んだ道を突き進む意志がある。魔法は使わない主義ではあるが剣術に関しては“ガーディアン”のトップクラスを誇る、その剣さばきは剣筋が見えない。出身はナチュリコムの南西にある国、ガルンゼントで親がナチュリコム出身だったため、やって来た。実はかなりの酒好きでアスカとルエとはのみ仲間である。
　現在はディルを探しに旅をしている。

バーシュについて
　一人は渋いキャラ出したいなぁと思い、考えたキャラ。っと言いつつ全く活躍させていない、でも彼の話も書きたいと思います、番外編で……。原作当初にはいませんでした。関係ない話ではありますが一応、この世界には魔族もいます、なのにまったく出ていないと言う事実。三章からは頑張って出せるようにします。

ルエ・ディルティーラ
性別・女
年齢・２３歳

身長・１７３？
体重・５８？
武器・なし（拳、保護のグローブを付けている）
魔力・不明（苦手のため使わない）
所属・“ガーディアン”ナチュリコム支部　第十二部隊
　第十二部隊の副隊長。黒髪のショートヘヤーで手入れは一応している（リエに言われて）、目つきが若干鋭いがそこまでではない、程良く付いた筋肉のおかげでいい体つきになっている、以外と胸は大きい。性格は姉御肌で面倒見が良く、男勝りのため男には親友扱い、女にもてる性質になってしまった、以外に手先は器用、サバイバル能力に特化している。そのおかげでギンリュウほどではないが自然の知識がある程度ある。酒好きでよく、バーシュとアスカとで飲みに行く事が多々ある、部隊の中では一番、酒に強く、誰も敵わないと言われている。
　現在はディルを探しに旅に出ている。

ルエについて
　第二章ではまったく（ミリアも）出ていませんが第三章では活躍します（多分）。ルエは原作当初から出てきました、ルエが一番最初にギンリュウ（原作当初）と仲良くなったキャラなので、この小説のギンリュウもフレンドリーです。もちろん名前は漢字、性も違います。しかしそれ以外はまったく変わらないキャラクターですが、ディルが出てきてから、ギンリュウとの絡みが少ないです（親友として）、ですから第三章ではギンリュウとの絡みも入れたいと思います。

メアル
性別・女
年齢・１６歳
身長・１６４？
体重・４７？

武器・なし
魔力・聖力系など
所属・“バジリスク”第二研究所　実行部隊
　戦乙女の一人。金髪のショートヘヤーでいつも無表情で半目である。結構スタイルがいい。常に冷静沈着で口数が少ない、しかし可愛い物が大好きで、可愛い物を見つけるといきなり口数が多くなる。ドゥアーク神殿でディルに助けられた事がきっかけで彼に思いを寄せるようになった、そのため彼に言い寄せるようになり、ディルを困らせる事もしばしばある。剣などの武器は使わないが身のこなしが軽く素早い、戦乙女のために魔力を無理矢理底上げされて高い、しかし、その副作用として体力が若干衰えている。ディーンとは親友である。
　現在は気ままな旅をしている。
メアルについて
　作者の悪戯心から生まれてたキャラクターです（おい）。ディルとくっつけるために考えたキャラで、最初は第二章でディルがさらって、ずっと側に置くのが当初の予定でしたが、予定変更、第三章もディル中心の話でしたが、それも変更しました。しかしながらディルとのフラグを立たせたのは予定通りですので問題はないありません、っと思います。第三章では中心キャラの一人になる予定って言うかなります（決定です、本当です）。

ディーン
性別・女
年齢・１８歳ぐらい
身長・１７２？
体重・５５？
武器・ナイフ（銘はなし）
魔力・爆裂系、防御系
所属・“バジリスク”第二研究所　実行部隊　隊長

メアルの親友、戦乙女。黒髪のロングヘヤー、常に悪魔だと思わせる笑顔をしている、とても美人。性格は悪戯ぽく戦闘狂だが、親友思いで面倒見の良い姉御肌でもある、ドゥアーク神殿ではマリンが力を解放させた際にギンリュウと共に魔法陣を破壊し、メアルを助けた程、メアルが大事（親友として）。現在は親友としてメアルの恋を応援中である。戦闘スタイルはナイフ一本の格闘戦、魔力は生まれつき高いため、底上げされる事はなかった、防御系はメアルを守るために覚えた（それぐらい親友思い）、格闘はかなり強い、ちなみに我流である。

ディーンについて

メアルのパートナーとして考えたのが、このキャラクターです。原作当初はおらず、連載当初は出てくる予定はありませんでした。ある意味でギンリュウと気が合いそうなキャラだなぁ……っと、このキャラのセリフを書いてて思うのは、多分、自分だけだろうと思います（感覚は人それぞれ）。とりあえず、今のところはそんな重要キャラではありません、でもいつかは重要キャラにするかも……。

登場人物紹介？（後書き）

本当はもう少しキャラを紹介したかったのは本音です。
次回は世界を紹介したいと思います、後、用語も

世界・組織・用語設定（前書き）

世界観と組織、用語の説明です。

世界・組織・用語設定

世界

ヒュースター…ギンリュウ達が住む世界。魔法と機械の両方があり、各国によって違った発展の仕方をしている。世界の秩序を守るために各国、協力して世界組織「ガーディアン」を設立した。三つの大陸と七つの国から成っている。年数はＧＡ（ガーディアン）歴と称してあり現在はＧＡ５０年。

ナチュリコム…砂漠や樹海など、様々な自然がある国。ギンリュウやリエはこの国出身である。首都はベーゼル。自然が豊富のため、街や村を一歩出れば、まったくの別世界と言ってもよい程である、ガーディアン部隊数は十五。特産品は野菜全般。

ティルード…鉱石が豊富な国。現在ディルがいる国である。首都はバゼルンド。ナチュリコムとは隣国で貿易が盛んである。ナチュリコムの国境付近にはギンハクの森と呼ばれている草木が銀色に輝く森がある事でも有名である。ガーディアン部隊数は十八。

組織

ガーディアン…世界の秩序を守るための世界組織である。本部は世界の中心にある人工島。ある程度の実力がなければ本部で働く事等不可能である。本部の他、世界各国に支部を設けている。ガーディアンに入るためには育成学校に入るか入隊試験を受け、合格する事の二つである。

育成学校…各国の首都にあるガーディアンの隊員を育てるための学校。十三歳から入れる様々な学科があり、入学した際に適正検査を受け、学科が決まるシステムである。三年間しっかりと授業を受け

れば確実に入隊ができるが、入学試験が難しく、学費が高いために一部の人しか入れない。

レックス…ギンリュウとミリアが脱走した組織。聖鬼神の実体を知るために日々研究をし続ける。機関長はガゾーマ。聖鬼神を知るためなら犯罪をも犯すが、あくまで知るためにであって、極力人は殺さないようにしている。設立当時は聖鬼神を兵器と育てようとしたが、ガゾーマが機関長になってから探求のみ求める組織になった。

バジリスク…レックス同様、聖鬼神の研究をしている組織。規模等、詳細は不明。機関長はハーディア。
世界各地に研究所が存在しているらしいが、真実は不明である。また戦乙女という人工的に古の魔法を植え付けられた女性達もいる。
レックスとの違いは聖鬼神を兵器として扱う事だ。

用語
聖鬼神…古の魔法を扱う者達の事を指す。現在は封印されていないとされているが、ギンリュウとミリア、ガゾーマが聖鬼神だと言う事を発覚、子孫だったとされている。感情が極端に高まると暴走し、邪神状態になる。語源は聖なる神として崇められ、鬼神として恐れられた事から。

古の魔法…遙か昔に封印された五つの魔法を指す。その魔法は重力、爆裂、聖力、闇力、隕石がある。ギンリュウは重力の聖鬼神とされている。中でも聖力は邪神状態を止める唯一の魔法である。

戦乙女…バジリスクが人工的に古の魔法を植え付けられた女性を指す。適正があれば男でも植え付けられるが、ハーディアは女性しか植え付けられていないため、このように呼んでいる。聖鬼神とほぼ同じ特性をもっている。

魔教師…正式には魔物調教師。ディルがその伝統者。人間とまったく心通わない魔物と仲良くなれ、心強い味方にする能力を持つ。しかし、現在はすでに無くなっているとされている程、数が少ない。

世界・組織・用語設定（後書き）

次で第三章が始まります。

第十七話　絶対王政（前書き）

第三章開始始まりです。

第十七話　絶対王政

ギンリュウ達がディルを探すために旅を出てから一週間、ナチュリコムとディルートの国境付近にある検問所。
「あっさりだったな……」
「もう少しかかると思っていたわ」
ギンリュウとリエは検問所を通れるのは少なくても明日だと思っていた。しかし、どういうわけか小一時間で終わってしまった。
「よし、これディルートに入れるぞ」
「バーシュさん、あなたは何者だよ？」
「ふっ、ただの侍さ」
「なに、そのかっこいい言い方、むかつく」
検査が早く終わったのはバーシュがいたからだった、バーシュはどうやら何かしらの関係者だったのようで、検問の人たちは驚いた顔をしてそのままほとんど検査なしで通行許可がおりた。
「さて、これからディルートの貿易の街に行くんだが、ひとつ注意してほしい」
「注意ですか？」
「うむ、この国はナチュリコムと違い、絶対王政なのだ」
ちなみにナチュリコムは共和国に分類されている。
「それがどうかしたのか、バーシュ」
「俺はこの国の王の近衛兵をやってた事があってな、どういう訳かこの国には排他的な意識があるのだ」
「それまた、どうして？」
ギンリュウはバーシュに聞いた。排他的な意識を持つ国はこの国以外にないだろう。その理由はガーディアンだ。
「確かにそうね、“ガーディアン”の規則には国と国の協力が不可欠だから排他的な意識は良くないって言ってたわよ」
リエの言うとおりだった。“ガーディアン”は世界の秩序を守る

ために作られた世界組織、お互い嫌悪し合っている国でも協力ぐらいはする。
「まぁ、この国は世界の意識が一歩遅れている事もあるがな。俺はそれが嫌でナチュリコム支部の方に入ったんだ。まぁ、これから行く街はそうじゃないがな」
「そうだったんですか……」
ギンリュウ達はそんな話をしながら、ディルートの貿易の街、ガラアンドに着いた。
「久しいなここも……」
「あぁ、この街なら俺も知っています」
貿易の街ガラアンドはナチュリコムに交易品を送るための拠点であり。唯一、排他的意識がない街でもあった。
「この街にとってはナチュリコムは大切なお客さまだからな、いくら王政があるとはいえここはまったくの別の政治が働いているともいって良い」
「なるほどねぇ……」
そんなとき、一人の女性が話かけてきた。
「あーら、誰かと思ったら裏切りのバーシュじゃない」
「クリントラかぁ……」
バーシュは明らかに敵意を持った目を女性に向けた。ギンリュウ達はわけのわからずにバーシュと女性を相互に見ていた。
「そこにいるのは？まさか、ナチュリコムの奴じゃないよね」
「相変わらずだな、その他の国を見下す態度は……」
「ふん、あなたこそよくもまぁこの国を裏切ったくせに戻ってきたわね」
裏切り？ギンリュウは疑問に思った。
「あの、バーシュさんがこの国を裏切ったって言うのはどういう事なんですか？」
「誰、あなた？」
「ナチュリコム支部のギンリュウ・スペイエルと言います」

「はっ、雑魚であるナチュリコムの人間が私に質問するなんて良い度胸しているじゃない」
「雑魚ですって……！」
クリントラと呼ばれた女性の言葉にリエは食いかかった。
「ガーディアンの規律も守れない国にナチュリコムを雑魚呼ばわりする資格はないのよ！このバカ女」
「隊長、落ち着いてください。これがこの国のガーディアンのやり方ですから」
「そうよ。せっかくだから教えてあげる。私はディルート支部第三部隊隊長、マールト・クリントラよ」
「ナチュリコム支部第十二部隊隊長、リエ・マレンデカルです」
リエは睨むような目つきでマールトを見つめた。
「ふん、何のようなのよ」
「実は私の所の隊員が任務中、敵のテレポに巻き込まれて行方不明。あなた達の所の支部には話を通してあるはずよ」
「あぁ、そんな事言ってわね。どうでもいいわ」
呆れた表情で言うマールトにギンリュウは不快感を覚えていた。
（なんだよ、こいつ。俺ならまだしもバーシュさんと隊長までバカにしやがって）
「まぁ、せいぜい頑張る事ね」
「そのつもりですので、また」
ギンリュウ達はその場から離れようとすると、突然マールトが声をかけてきた。
「待ちなさい！」
「まだ、何かようですか？」
「バーシュとそこの銀髪男、あなた達は私と一緒に首都に来なさい」
「「はぁ！？」」
ギンリュウとバーシュは絶句した。いきなりのマールトの誘いにびっくりした。
「だから、私と一緒に王に会いに来るの！わかった？」

「待て！俺はともかく、なぜギンリュウまで！？」
「そ、そうですよ！？」
バーシュはこの国を裏切った事に何かしら関係あるだろう。しかし、ギンリュウはそうではない。この国とは一度も関わってない。
「あなた、もしかして聖鬼神だったりする？」
「「「「！！」」」」
「……何故、そう思ったのですか？」
「私は魔力感知する事には自信あるのよ。そこの女の子ならともかく、あなたは異様よ。だからきてもらうのよ」
ギンリュウはめんどくさいと思った。前にもこんな事があり、その時は逃げてきたのだが今回はそうはいくまいと思った。
「悪いすけど、俺は仲間をいち早く捜したいんでその話断ってもいいすか？」
当然のような言葉でギンリュウは言った事をマールトは驚いた。そもそも、ギンリュウはマールトの事をリエ以上に嫌っていた。何故か、それは仲間をバカにする態度であった。
「正直に言わしてもらいますけど、どーも、あんた、俺の仲間をバカにしているでしょう？俺はそう言う奴が一番大嫌いなんですよ」
マールトはこめかみをひくひくいわしながら、黙ってしまった。
「まぁ、そう言うわけだ。王には会いに行くが、今は勘弁してほしい」
「じゃぁ、情報収集に行きましょう？」
「了解です」
ギンリュウ達は今度こそ、その場から離れた。
「……ちっ、覚悟しなさい。ギンリュウ・スペイエル！」

首都　バゼルンド
「ほう、バーシュがココに？」
「はい、あの裏切り者は今はナチュリコムの犬となっております」
まだ十代半ばの少女は自分の近衛兵の報告を聞いていた。彼女こ

そがこの国の王、名は……。
「どうなさいます？ルーチャ様」
「ふむ、あいつは何しにココにきたんじゃ？」
「ガーディアンの連中によると行方不明の仲間を捜しにやってきたそうです」
すると、少女は、ルーチェ・ハルトン・ティルートは不敵な笑みを浮かべた。
「だったら、その者を探し出し捕まえるのじゃ」
近衛兵は驚いた顔になった。しかし、すぐに顔を下げ、何も言わずにその場を去った。沈黙の承諾、それがこの国の王に対する礼儀であった。
「何をするおつもりで？」
「レイ、我は良い事を思いついたぞ」
まるで子供が悪戯するような笑みを浮かべた。

「……！？」
ガラアンドで情報収集していたバーシュは何か寒気を感じ取り身震いを起こした。
「……？」
「どうしたんですか？」
ギンリュウは情報を聞き終わったのでバーシュの元に戻っていた。
「いや、なんか寒気を感じてな。……？」
「はぁ……」
「まぁいい、でどうだ？」
「あ、えっとですね……」
バーシュは結構気にせず、そのまま情報収集を続けた。

一方　ディルたちは……。
「はぁ、道に迷った」
「あは」

「「「あはじゃない（ですよ）（ねーよ）！？」」」
ギンハクの森で道に迷っていた。

第十七話　絶対王政（後書き）

なんかバーシュまで重要に……。とんでもない事になってきた。

第十八話　首都へ！（前書き）

最近、ディルの事に関して、この章だけでは終わらない事に気が付いた。（汗）

第十八話　首都へ！

ディル達はギンハクの森で迷子になっていた。理由は単純明解だった。
「あっち！」
“バジリスク”の機関長、ハーディアの妹、エーマ。彼女は単純な道でも迷う方向音痴だった。
「では、こっちにしましょう」
エーマ以外の三人はエーマが指した道とは別の道を選んだ。
「ちょ、ちょっと！？なんで？」
「「「あなた（お前）の方向感覚は信用なりませんから」」」
ばっさりと言う。当然のことであった。
「しかし、よくもまぁ、今まで無事でいられたなぁ」
「はい、正直に言いますと迷子になった時はもう駄目かと思いました」
「本当ですね。この子がいなきゃのたれ死んでた」
ディルはそう言って隣で歩いている魔物、“銀狼（シルバー・ウルフ）”を撫でた。
「バウゥ！」
「ぶ～、私の勘よりその魔物の方が勘がいいわけ？」
「「「当然」」」
「バウ……」
「はう……」
銀狼まで呆れてしまった。絶対にこの人を一人にさせてはならないっと三人は誓った。
「あと少しで森を抜けます」
「じゃあ、この子ともお別れだね。ありがとう、群れに戻って良いよ！」
ディルが銀狼の額に手を当てると銀狼はそのままギンハクの森の奥に行ってしまった。

「じゃあ、行くか！」
「えぇ、首都バゼルンドへ参りましょう」
「ほらほらエーマさん、いつまでふてくされているのですか？」
「……」
ディルはエーマの手を無理矢理引っ張り、四人はギンハクの森を出た。

一方、ギンリュウ達は……。
「駄目ね、ここも目撃情報はないみたい」
ガラアンドで情報収集をしていたギンリュウ達は宿の食堂で集めた情報を言い合っていたが、このガラアンドでディルの目撃情報がなかった。
「やはり、バゼルンドに行かなければならないのか……」
バーシュは複雑な表情になった。
「あぁ、王に会いたくないのですか？」
「いや……」
ギンリュウはバーシュに質問したら、これまた複雑な顔をしていた。
「たしかにこの国の絶対王政が嫌でこの国を出ていってしまったが、王に会いたくないわけではない」
「そうなんですか？」
「あぁ、この国の真実の権力者は王の側にいる大臣達だ。俺は何でも抗議したが駄目だった」
「うわぁ」
ギンリュウとルエは驚愕な顔をした。
「……実はな、隊長達とは別に情報を集めていたのだ」
「別の？」
リエは眉をひそめた。
「今の王の事だ。俺がこの国を出ていったのは五年前でな、もしかしたら王が変わっているかもしれないと思ってな」

「あぁ、そういえば一時別行動してましたね」
ギンリュウは思い出したような顔をした。バーシュは話を続けた。
「案の定、王は変わっていた。おかしな事に先王の娘が王になっていたのだ」
「どういう事ですか？」
「王には息子がいたはずなのだ。なのに娘が王になっているのはおかしい」
バーシュは何かあると思っていた。だが、その話を聞いたギンリュウ達も同じ事を考えていた。
「一応、その娘はいくつなのですか？」
「確か、俺がこの国を出ていった時はたしか十歳いくかいかないの歳だったのと思う」
「息子の方は？」
「十六だったはずだ」
バーシュは思い出したような口調で言った。
「う～ん」
リエは考えていた。そして一つの結論に辿り着いた。
「よし、首都に行くわよ！」
「「「「はぁ？」」」」
リエ以外は驚いた。
「だって、どっちみち首都に行かないと支部に行けないし。それにうまくいけばその王に会えるかもしれないしね」
「まぁ、そうだな。俺は賛成するけど。決めるのはバーシュさんです」
バーシュは悩んだ。五年前、裏切りとしてこの国を出ていった時まで今の王とは親しかった。だから、会いに行かなければならない、先王のために……。
「……いこう、王に会い。先王はどうしているのかも聞きたい」
「ほんじゃあ、明日朝一でこの街を出ようぜ」
「そうですね、行きましょう」

「それじゃ決定ね」
バーシュの決意を聞き、リエ達も賛成した。
「よし！とにかくディルを探しつつ、その王に会いに行こうぜ！」
「「「おー！」」」
そんなギンリュウ達の様子を見て、バーシュは微笑んだ。
（ありがとう、みんな）
こうしてギンリュウ達は首都に行くことを決めた。出発するのは明日だと決め、その夜を過ごした。

首都　バゼルンド　バゼルンド城　王の間
「と言うわけで、この法律を成立させたいのですが……」
「駄目じゃ」
現在、王の間では王であるルーチェがいないにも関わらず会議を行っていた。
「どうしてですか！いくら絶対王政とは言え市民の声も聞くべきです。さらにこの法律は王であるルーチェ様自身が考えた法律です！」
「あんな小娘の考えた法律でこの国が良くなるとは思えないな」
「貴様！ルーチェ様を侮辱するつもりか！？」
どうした訳か三人の年老いた大臣と二人の近衛兵が言い争っていた。
「この法律は政治や経済を知る我にもいい法律だと思うがな。汝らの意見も聞きたい」
「ふん、あの駄王の娘なんぞの法律を受け入れたらこの国は一気に駄目なる」
「駄目にしているのは貴様らであろう！」
一人の近衛兵が声を荒立てている。実際、この国の経済は周りの国に比べかなり遅れている。先王はそれでは駄目だと貿易などを行っているのだが……。
「貴様らのその保守的な態度のせいで民が苦しんでいる！何故、それがわからんのか！」

「落ち着け、レイフェイ。これ以上、言っても無駄であろう。それにあの件もある」
「あぁ、あの堕落近衛兵の事か」
「バーシュ殿は堕落などありません！この国を貢献した立派な近衛兵です。いくら裏切りをしたとはいえ堕落っと言うではない！」
さらにレイフェイ・ラーンは声を荒立てた。
「……バーシュ殿の件については我らにお任せを。汝らが手を出す事ではない」
「わかっておる。いいか？必ず抹殺しなさい」
「……承知」
そう言って、二人の近衛兵は王の間から出ていった。

バゼルンド城　渡り廊下
「カエラル殿！本当にバーシュ殿を殺す気ですか！？」
「まさか、報告によればバーシュ殿は“ガーディアン”、五年前に裏切ったとは言え殺すと問題が出てくる」
カエラル・バーオラは冷静な口調で言う。彼は近衛兵だけではなく政治家としてもこの国では有名だった。
「まったく、大臣達は自分達の意見を無理矢理通し。王であるルーチェ様の必死に考えた法律をまったく見向きもせずに無視をする」
レイフェイは怒りを込めて言った。この国は今や年老いた大臣に権力を握られている。
「このままでは大臣達に殺された先王様に申し訳ない……」
「しかし、証拠もなく、問いただす事はできない」
カエラルは冷静な口調で言っているが表情は悔しいそうな顔をしていた。
「では、どうすればいいのだ！」
「まずはバーシュ殿が探しているディネカルという者を探そう。そうすれば、ここに留まってくれなくても姫のために協力してくれるかもしてん」

「そうだな、バーシュ殿には悪いがその仲間はこちらで保護をしよう」
二人は近衛兵の宿舎に向かった。

翌日　ガラアンド
ギンリュウ達は宿を出て、車に乗り込んだ。
「よし、全員乗ったな。出発するぞ」
ギンリュウ達を乗せた車は首都を目指して走り出した。これからこの国を取り巻く出来事が起こることを知らずに……。

第十八話　首都へ！（後書き）

とんでもないことになった……。

第十九話　出会いやら再会やら（前書き）

遅くなってしまって、申し訳ございません！
では、第十九話をどぞ！

第十九話　出会いやら再会やら

ギンリュウ達が首都バゼルンドに向かって四日経ち、ついにバゼルンドに着いた。
「やっと着いたわ」
「まったく、ここまで時間がかかるとはな」
本来ならばもう少し早く着けるはずだった。だが首都に入るための許可書の発行に時間がかかり本来三日で着く予定が一日遅れて着いたのだ。
「さっさと宿を探しましょう。バーシュ、いいところない？」
「だったら、いいところがある。まぁ、今そこに向かっているが……。着いたぞ」
「はやっ！？」
バーシュはどうやら最初からそこに向かっていたようだ。
「ちょっと、古くさくない？」
「確かに見た目は古いが、中は……」
「快適なのさ！」
後ろから声が聞こえ、ギンリュウ達は振り返った。そこにいたのは金髪のショートヘヤーでツンツン頭をしており、顔つきは元気な少年を思わせた。
「久しぶりすね！バーシュの兄さん！」
「ガーバ！」
「ガーバ？」
バーシュはガーバの事を紹介した。どうやら、ギンリュウ達が泊まろうとした宿を切り盛りしている主の息子でバーシュの事を実の兄だと思って慕っていたようだ。
「俺はギンリュウ、ギンリュウ・スペイエルだ」
「妹のミリアです」
「リエ・マレンデカルよ」

「ルエだ！」
ギンリュウ達も自己紹介し、宿の中に入った。
「お帰りガーバ……」
「お久しぶりです、女将さん」
「バーシュ！生きてたんだね！」
「えぇ、なんとか生きてます」
女将、ナーシュネルは喜びを表した。
「あんた、あんた！」
「なんだ、騒がしい……」
出てきた体のごつい男はバーシュを見て驚いた。
「バーシュ！いつからここに？」
「この国に入ったのは五日前です。ここに来たのはついさっきですが……」
「そうか……、いや、よくぞ生きていたな」
バーシュはギンリュウ達を紹介した。そして、何故この国に来たのかを話した。
「……と言うわけなのです」
「そうか。まぁいい、今日はゆっくりしていけ！王女に会いたいだろうからな……」
「はい……」
バーシュは頷いた。その後、ギンリュウ達は部屋を用意されそこで一晩を過ごした。

そして、ここにある人物達がこの国に着いた。ガゾーマとナミアである。
「ギンリュウ達はすでにこの首都にいるようですね」
「ふむ、確かにこちらでも確認した」
二人はエーマを説得させるために旅をしていた。気配を探りつつ、エーマを探していたが、ついにこのバゼルンドに着いたのだ。
「それにエーマもここにいるようだ」

「こちらでも確認はできていますが……」
ナミアは怪訝な顔をして言った。
「何故にあんな所にいるのでしょうか？」
「……考えられるの一つしかあるまい」
ガゾーマはため息をついた。
「まったく、エーマは相変わらず、手間をかけさせるな」
「では、すぐに向かいますか？」
「いや、今夜はもう遅い、宿を探して泊まろう」
「では、すぐに探してきます」
っと言ってナミアは猛ダッシュで宿を探し始めた。それから……。
「見つけました！」
「早い！？」
さすがのガゾーマもこれには驚いた。まだ十分も経っていたなのだから。
ギンリュウとミリアの姉、ナミア。その者は主のためならば己の限界すらをも越える戦士なり。

一方、ディルたちは正体不明の敵に襲われていた。
「ウオォォォオオオ！！！」
ディルはムーンサルトを繰り出し、敵を吹き飛ばす。だが、敵はかなり多い。
「なんだってんだ！急にこの街に入ったら襲いかかりやがって！」
「ああー、もうめんどくさいな……」
ディーンとエーマはメアルを守るようにして戦っていた。
「ぐぅ……」
「ディル！」
ディルは敵の蹴りをかすめながらも避ける。しかし、メアルとディーンは古の魔法を使う事を禁止されている。故に実質、戦力はエーマとディルだけだった。
「この、いい加減にしてよ！」

ディルは拳を地面に叩きつけると地面が次々と亀裂が入る。ディルお得意の格闘術“地裂拳”である。
「「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」」
「くそ!こいつら化け物だ!?」
「くそ、撤退だ、撤退ーーー!!」
一人の男がそう言うとさっさとディル達の目の前から消え去った。
「まったく、何だってんだよ」
「いきなり、襲いかかってきて。でも、弱かったな……」
ディルはそう言うが、彼らはガーディアンで言う隊長級の実力の持ち主なのだ。ディルが一人で数人と戦えるのは普段、ギンリュウやリエ、バーシュと組み手。先天的な身体的能力があるからだ。それでもギンリュウ達には一度も勝ったことはないが……。
「ん〜、でもさ……」
「何ですか?」
「ここ、どこだろうね〜?」
「「「絶対、あんたのせいだ」」」
ディルたちはまた迷っていた。
「まったく、あなたはいくらなんでも強引なんですよ!」
「たしかにいきなりここから入ろうなんてな……」
「とりあえず、雨が降ってきそうですしどこか建物に入りましょう」
メアルの一言で全員が頷いた。
「じゃあ、あそこに入ろう!」
「「「絶対に嫌だ(です)」」」
「よし、決定!」
っと言ってエーマは一つの塔に向かった。
「「「待ちやがれ、この方向音痴がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」」」
ディル達はエーマ達を追った。

???
「ん?誰か来たな?」

小さな部屋に合わないようなシンプルなドレスで身を包んだ女の子とメイド服を着た女性がいた。
「では、私が確認してきます」
「ふむ、よろしく頼むぞ」
「では」
女性は一礼をしてから部屋を出た。そしてすぐ側にある階段を下りて一番下に向かった。その時、声が聞こえた。
「ごめんくださーい」
（？一体、誰なんでしょうか）
「誰ですか！」
「すいません、道に迷ってしまって。雨宿りをさせてもらいませんかね」
女性は目を見開いた。四人共、知らない、少なくても城の者ではないのだから……。

「えっと、すいません……。いきなり、押し掛けてしまって」
ディルはペコリっと頭を下げる。すると女の子はあまり気にしていないような態度で……。
「いいのじゃ、いいのじゃ、我は心が広いからの。気にすることはない」
「まるで、王女のような口調ですね……」
メアルがそう指摘すると女の子の代わりに女性が答えた。
「ようなではなく、本物の王女です。あなた達こそ、どうやってこの城の敷地内に入ったのですか？」
「「「はい？」」」
ディルとメアル、ディーンは呆けた声になった。
「え、あのさ、ここはどこなんだい？」
「ここは、バゼルンド城。そしてこの方は先王の娘である現王の……」
「ルーチェ・ハルトン・ティルートじゃ、よろしゅうの」

「「「はいーーーー！？」」」
ディル達はびっくり仰天してしまった。それもそのはず、エーマのせいで道に迷い、辿り着いたのが城の敷地内、さらに目の前にいる女の子が王なのだ。
「して、そなたらの名前は……？」
「メアルともうします」
「ディーンって言うんだ。んで、こいつはエーマ」
「ディネカルです」
ディルが名前を言うと、ルーチェはキュピーンと目を光らせた。
「そなたがバーシュが探している。ディネカルとな！？メルル、我は運がいいぞ！」
「……えっと、あの、一応聞きますけどバーシュさんを知っているのですか？」
ディルはいきなりの事で話しが付いていけなくなり、質問をした。
「知っておる共、バーシュは我の友にして近衛兵。それに……」
ルーチェは頬を赤らめた。メルルと呼ばれた女性以外は頭を傾げた。
「我の初恋の人じゃ」
「はいーーーーーーー！？」
ディルは思い切り叫んでしまった。

今、この国の首都にはとんでもない人達が集まっている事をまだお互い知らない。

第十九話　出会いやら再会やら（後書き）

あれ、とんでもないことになってきたぞ？前回も言ったような気がするが……。気にしない！

第二十話　協力と潜入（前書き）

今回は前回より早めに更新ができました。

第二十話　協力と潜入

ディルは唖然としていた。まさか、ここが城の敷地内で、さらに目の前にいるのがこの国を王女なのだから。
「何故、バーシュがこの国を裏切ったかはわからん、だが、私にはわかる。バーシュはこの国を愛しているのだと。だからこそ、この国を出ていったのだと」
「ちょっと待って、正直、話についていけてないんだが……」
ディーンがそう言うと、メイドであるメルルが口を開いた。
「この国は今、このルーチェ様が治めています。しかし、実際はこの国の大臣が政治を行っており。近衛兵の間では、大臣のせいでこの国の治安や経済が悪化していると噂をしているのです」
「でもでも、この子が王女様なら口出しくらいはできるじゃないのかな？」
エーマが疑問を言うと、それもメルルが答えてくれた。
「確かにそうです。現在の王はルーチェ様、だから、この国の事を思わなければならければなりません」
「実際、我は近衛兵を使って、城下町の状況や近辺の情報を得ているぞ」
「でも、ナチュリコムにいた時の噂では、治安が悪くなっていく一方だって」
次はディルが疑問を言った。
「実は我らの意見は無視されているようなのじゃ」
「無視されている？」
「はい、大臣はルーチェ様の意見は批判して、自分の意見を無理矢理、肯定しているようです」
「ひどいですね」
メアルはひどくうなだれた。ディル達もそう思った。
「ですが、大臣は恐れているのです」

「恐れている？」
「はい、五年前に追い出したバーシュさんがこの国にいると言う報告を……」
「バーシュさんがここにいる！？」
ディルは驚いた。まさか、こんな国にバーシュがいるとは思ってもいなかった。しかし、次のメルルの一言でさらにディルは驚愕する事になる。
「それだけではなく、ギンリュウ・スペイエル、他三名の仲間と共にいるそうです」
「え……、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」
ディルは三度目の驚きの声を上げた。

一方、宿に泊まっていたギンリュウ達は意外な人物達と再会していた。
「まさか、君たちがこの宿に泊まっていたとはね」
「俺も驚いたよ、ガゾーマ」
そう、意外な人物とはガゾーマとナミアであった。ギンリュウ達が夕食を食べようと食堂に向かったらガゾーマ達がいたのだ。今、ナミアはリエとミリア、ルエの話し相手になっていた。バーシュはギンリュウの隣で黙って二人の話を聞いていた。
「なんで、この国に来たんだ？」
「もちろん、エーマを説得しにね。彼女は姉という理由で“バジリスク”に入ったはずだ。だが、多分もう、愛想尽かしているんじゃないかなと思ってね」
「まぁ、俺たちも一度、そのハーディアって奴と出会ったが、嫌な気配しか感じなかった」
ギンリュウは夕飯後のお茶を一口、飲んで、話を続けた。
「ハーディアは君も私も知らなかった存在だ。今までどこで研究をしていたか、わからない」
「エーマの姉さんはその事を話さなかったのか？」

「一度だけ、姉がいるという事は聞いたが、それっきりだ」
「確か、ディルはエーマの姉さんの所にいるんだよな。今、どこにいるか、わかるか？」
ギンリュウがその事を聞くと、ガゾーマは苦い顔をした。
「実は、だな。居場所は特定できたのだが……」
「「？」」
ギンリュウとバーシュは頭を傾げた。
「その居場所というのが、バゼルンド城の敷地内なのだ」
「「……はぁ？」」
二人は気の抜けた顔に思わずなってしまった。そして……。
「「はぁいーーーーーーーーー！？」」
思わず、大声を出してしまった。
「ギンリュウ、うるさい！」
リエはギンリュウにだけ怒鳴った。
「なぜ、俺だけなんだ！？」
「それより、どういう事だ。城の防衛力はかなりのもの、そう、やすやすと入れるわけが……」
「あぁ、そう言うことか……」
ギンリュウは納得したような声を出した。
「ふむ、そう言うことだ」
「どういう事だ？」
バーシュはギンリュウに質問をした。すると今度はギンリュウが苦い顔をした。
「エーマの姉さんって人が、今、ディルと一緒にいるらしいんだけど。その人、強引かつ超絶方向音痴でな。何故、その道でここに出るのだってくらい、迷子の達人なんだ」
「……」
バーシュは呆れて物も言えなかった。
「それよりもどうする？やっぱり、城に侵入するのかい？」
「するに決まっている。姫の無事を確かめたいのだ……」

「だったら、この時だけ、お互い協力しないか？」
ガゾーマの言葉に反応したのはリエとナミアだった。
「なんで、あんた達と協力しなければならないのよ！」
「ガゾーマ様、私は反対です！ギンリュウとミリアだけならともかく……」
「いいんじゃないか？」
ギンリュウはガゾーマの提案に賛成した。ミリアとバーシュとルエはこくりと頷いた。
「ちょっと、ギンリュウ！こいつは敵なんじゃないの？」
「それはこっちのセリフよ！」
リエとナミアは相性が悪いと、この場にいた全員が確信した。
「じゃあさ、どうやって城に潜入するんだ？」
「「勝手に話を進めないでよ！！！」」
リエとナミアは反論したが、この後、ミリアにお仕置きという名の着せ替えさせられるとはまだ誰も知らない。
「実は、この宿と城の中庭は地下室で繋がっているのだ。俺が五年前、脱走した時に使ったから」
（脱走って、あんた、一体何をしたんだ！？）
部隊に入隊して、かなり経つが今ひとつ、わからない所がある。
それがバーシュだ。
「じゃあ、明日だな」
「ふむ、ではそうしよう」
ギンリュウとガゾーマ達は明日、バゼルンド城に潜入する事を決めた。

バゼルンド城　大臣室
「ドーダ様、裏切りのバーシュについて新しい情報が入りました」
蝋燭一本で照らされた部屋に月夜を見ている老人がいた。この人物こそが悪名高い大臣、ドーダ・ゴゼルだった。
「ほう、話してみよ」

「ガーディアンの犬共から聞いた話ですが、どうやらバーシュは仲間を捜している模様で」
「仲間？」
「はい、この者です」
部下がそう言うと、まとめた資料をドーダに渡し、ドーダはそれを見た。
「ふむ、この小僧か。ん？」
「どうかなさいましたか？」
「なるほど、こいつは使えるな」
部下がわけわからない顔をしていると、ドーダは陰険な笑みを浮かべた。
「こいつは幻とされている職業、魔教師（モンスター・チョイサー）だ。こいつを取り入れれば、バーシュなど、怖くはない」
「なるほど、では早速」
「ふむ、すぐさま探させよ！ディネカル・オークソンを！」
だが、ドーダは知らなかった。まさか、その探しているディルがすでに近くにいる事を、そして、自分の悪事を王女から聞かされている事を……。

翌日、ギンリュウ達は宿の食堂室に集まっていた。が、リエとナミアは不機嫌な顔をした。
「隊長、いくらガゾーマと姉さんが嫌いだからって不機嫌になるなよ」
「ナミア、これは仕方ない事だ。協力すれば、それだけで会える確率は上がるのだ」
「さて、では開けるぞ」
バーシュと宿の旦那、バーゼンは床を剥がし始めた。すると、隠し通路が現れた。
「ここからなら、城に入れる。だが、五年前とは違い、警備兵がいるかもしれない。全員、注意してくれ」

「よし、入るか」
ギンリュウを先頭に地下通路に入る。ギンリュウ達はなんとかしてディル達に会ってやるっと心の中で決意をした。

第二十話　協力と潜入（後書き）

最近、“ガーディアン”の仕事してなくね？っと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6923s/

聖鬼神

2011年10月3日03時39分発行